

松本市文化財調査報告 No.88

YASHŌMAE

松本市弥生前遺跡

—緊急発掘調査報告書—

1991・3

松本市教育委員会

YASHŌMAE

松本市弥生前遺跡

—緊急発掘調査報告書—

1991・3

松本市教育委員会

序

松本市街の南東に位置する中山地区中和泉は、以前より様々な時代の土器や石器が出土することから遺跡の存在が知られていました。また、周囲の丘陵には県下最古級の弘法山古墳をはじめ30余基の古墳が分布し、歴史の古さが窺えるところであります。しかしながら、かねてから進行中の県営ほ場整備事業が当地にも及ぶことになり、埋蔵文化財包蔵地弥生前遺跡一帯もその対象地となりました。そこで当該文化財の保護を図るため、松本市が長野県松本地方事務所から委託を受け、松本市教育委員会がほ場整備の工事に先立って発掘調査を実施し記録保存を行うこととなりました。

発掘調査は市教育委員会職員や地元の歴史研究者の方々で組織した調査団により、平成元年8月から翌1月の長期にわたって実施されました。作業にあたっては酷暑、また厳寒の時期にあり、さらに大量の湧水に見舞われるなど困難を極めました。参加者の皆様の並々なぬ御尽力により無事遂行することができました。その結果、縄文時代の環状集落の全容をほぼ解明するというすばらしい成果を得たわけであります。

しかし、本調査の終了と同時に、私達が先祖から受け継ぎ後世に伝えるべき文化遺産である遺跡が、またひとつ消滅したことも事実です。国際化社会といわれる今日、それ故にいっそう我が国の独自の文化と伝統が問われる時に、祖先が残した文化財を保護し、研究することは大いに必要となりましょう。今回の調査が微力ながらもその一助となれば幸いです。また埋蔵文化財保護の気運高揚につながることを望むものでもあります。

最後に、本調査実施にあたり多大な御理解と御協力をいただきました中山土地改良区、地元協力者、関係者の皆様に心より感謝申し上げます。

平成3年3月

松本市教育委員会 教育長 松村好雄

例 言

1. 本書は平成元年8月7日から同2年1月9日にかけて行なわれた、松本市中山中和泉に所在する弥生前遺跡の緊急発掘調査報告書である。
2. 本調査は平成元年度県営ほ場整備事業に伴う発掘調査であり、松本市が長野県より委託を受け、松本市教育委員会が実施した。
3. 本書の執筆は第1章：事務局、第2章第1節：太田守夫、第3章第3節 1.：新谷和孝、2～4：関沢聡、その他：竹内靖長が行なった。
4. 本書作成に関わる作業は次の方々の協力を得た。
土器復元・拓影：五十嵐周子、横山真理
遺物実測・トレース
土器：伊丹早苗、今村克、松尾明恵
石器、土偶・土製品：久根下三枝子、関沢聡
遺構図整理・トレース：赤羽包子、關嶋八重子
図版作成：赤羽包子、久保田暁、林和子
遺構写真：沢柳秀利、竹内靖長
5. 遺物の写真撮影は宮嶋洋一氏による。
6. 本書の編集は事務局が行なった。
7. 本調査に関する出土遺物及び図類は松本市教育委員会が保管している。

目 次

第1章 調査経過	3
第1節 文書記録	3
第2節 調査体制	4
第2章 遺跡の環境	6
第1節 地形と地質	6
第2節 周辺遺跡	9
第3章 調査結果	11
第1節 調査の概要	11
第2節 遺構	14
1 住居址	14
2 土坑	41
第3節 遺物	53
1 土器	53
2 土製品	78
3 石器	82
4 石製品・金属製品	95
第4章 調査のまとめ	96
写真図版	

表 目 次

第1表 土坑一覧表	46
第2表 土製品一覧表	78
第3表 石器一覧表	83
第4表 石製品一覧表	95

目 次

第 1 図 遺跡の位置……………5	第 33 図 出土土器(3)……………57
第 2 図 地層断面……………7	第 34 図 出土土器(4)……………58
第 3 図 周辺遺跡……………10	第 35 図 出土土器(5)……………59
第 4 図 調査範囲……………12	第 36 図 出土土器(6)……………60
第 5 図 全体図……………13	第 37 図 出土土器(7)……………61
第 6 図 第 1 号住居址……………14	第 38 図 出土土器(8)……………62
第 7 図 第 2 号住居址……………15	第 39 図 出土土器(9)……………63
第 8 図 第 4 号住居址……………16	第 40 図 出土土器 拓影(1)……………64
第 9 図 第 5 号住居址……………17	第 41 図 出土土器 拓影(2)……………65
第 10 図 第 6 号住居址……………18	第 42 図 出土土器 拓影(3)……………66
第 11 図 第 7・9・10 号住居址……………19	第 43 図 出土土器 拓影(4)……………67
第 12 図 第 11 号住居址……………21	第 44 図 出土土器 拓影(5)……………68
第 13 図 第 12 号住居址……………23	第 45 図 出土土器 拓影(6)……………69
第 14 図 第 13 号住居址……………24	第 46 図 出土土器 拓影(7)……………70
第 15 図 第 14 号住居址……………25	第 47 図 出土土器 拓影(8)……………71
第 16 図 第 15 号住居址……………27	第 48 図 出土土器 拓影(9)……………72
第 17 図 第 16・17 号住居址……………28	第 49 図 出土土器 拓影(10)……………73
第 18 図 第 18 号住居址……………29	第 50 図 出土土器 拓影(11)……………74
第 19 図 第 19 号住居址……………30	第 51 図 出土土器 拓影(12)……………75
第 20 図 第 20 号住居址(1)……………31	第 52 図 出土土器 拓影(13)……………76
第 21 図 第 20 号住居址(2)……………32	第 53 図 出土土器 拓影(14)……………77
第 22 図 第 22・23 号住居址……………33	第 54 図 土製品(1)……………79
第 23 図 第 21・24 号住居址……………34	第 55 図 土製品(2)……………80
第 24 図 第 25 号住居址……………36	第 56 図 土製品(3)……………81
第 25 図 第 27 号住居址……………38	第 57 図 石器(1)……………88
第 26 図 第 28・29 号住居址……………39	第 58 図 石器(2)……………89
第 27 図 第 30 号住居址……………40	第 59 図 石器(3)……………90
第 28 図 土坑配置図……………43	第 60 図 石器(4)……………91
第 29 図 土坑(1)……………44	第 61 図 石器(5)……………92
第 30 図 土坑(2)……………45	第 62 図 石器(6)……………93
第 31 図 出土土器(1)……………55	第 63 図 石器(7)……………94
第 32 図 出土土器(2)……………56	第 64 図 石製品・金属製品……………95

第1章 調査経過

第1節 文書記録

- 昭和63年9月12日 埋蔵文化財保護協議を市役所及び現地にて実施。出席者は長野県教育委員会、松本地方事務所、松本市教育委員会。
- 12月22日 昭和64年度補助事業計画書提出。
- 平成元年4月3日 平成元年度国宝・重要文化財等保存整備費補助金内定。
- 4月3日 平成元年度文化財保護事業補助金（県費）内示。
- 5月15日 平成元年度県営会場整備事業中山地区弥生前遺跡埋蔵文化財包蔵地発掘調査委託契約を結ぶ。
- 5月24日 平成元年度国宝・重要文化財等保存整備費補助金（国庫）交付申請書提出。
- 7月18日 平成元年度国宝・重要文化財等保存整備費補助金（国庫）交付決定通知。
- 7月25日 平成元年度文化財保護事業補助金（県費）交付申請書提出。
- 8月1日 弥生前遺跡埋蔵文化財発掘調査の通知提出。
- 9月11日 平成元年度文化財保護事業補助金（県費）交付決定通知。
- 9月12日 平成2年度埋蔵文化財保護協議を市役所及び現地にて実施。出席者は長野県教育委員会、松本地方事務所、松本市教育委員会。
- 12月22日 平成2年度補助事業計画書提出。
- 平成2年1月17日 弥生前遺跡埋蔵文化財拾得届及び同保管証提出。
- 1月25日 弥生前遺跡埋蔵物の文化財認定。
- 4月4日 平成2年度国宝・重要文化財等保存整備費補助金内定。
- 4月4日 平成2年度文化財保護事業補助金（県費）内示。
- 6月2日 平成2年度国宝・重要文化財等保存整備費補助金（国庫）交付申請書提出。
- 7月24日 平成2年度国宝・重要文化財等保存整備費補助金（国庫）交付決定通知。
- 8月17日 平成2年度文化財保護事業補助金（県費）交付申請書提出。
- 10月12日 平成2年度文化財保護事業補助金（県費）交付決定通知。

第2節 調査体制

調査団長：松村好雄（松本市教育委員会教育長）

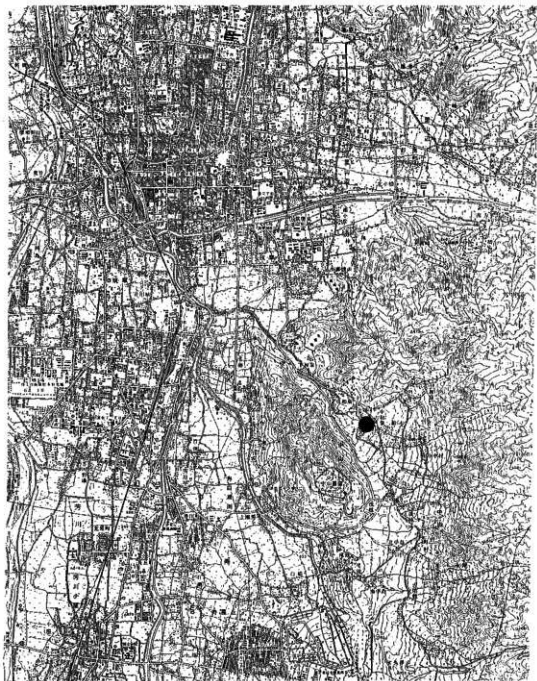
調査担当者：竹内靖長、沢柳秀利（社会教育課埋文担当）

調査員：太田守夫

協力者：赤羽章、赤羽包子、赤羽とみ子、五十嵐周子、石合佐千子、伊丹早苗、乾靖子、海野洋子、大出六郎、大谷光枝、奥原富蔵、小野光信、開鳴八重子、上條尚子、川上とよみ、川窪命子、神沢ひとみ、小島茂富、小松小きん、後藤みさを、下里みつへ、瀬川長広、高田好子、高田芳子、高橋八重子、滝沢直美、滝沢龍一、鶴川登、直井由加里、中島新嗣、中島春、中島久江、新田かおる、市崎助治、林伊和夫、林和子、北條多寿子、丸山麻子、丸山久司、丸山忠子、丸山誠、丸山よし子、三沢元太郎、南山久子、見村芳子、宮島みつよ、村山正人、百瀬きま、百瀬喜和子、百瀬静子、百瀬央士、百瀬啓芳、百瀬二三子、吉澤克彦

事務局：浅輪幸市（～H1）／荒井寛（H2～）（社会教育課長）、田口勝（課長補佐）、熊谷康治（課係長）、直井雅尚（主事）、降旗英明（主事）、関沢聡（H2～）（主事）、山岸清治（～H1）（主事）、赤羽美保（H1）、荒井由美（H2）





●印 発掘地点

1 : 50,000

第1図 遺跡の位置

第2章 遺跡の環境

第1節 地形と地質

1. 位置と地形

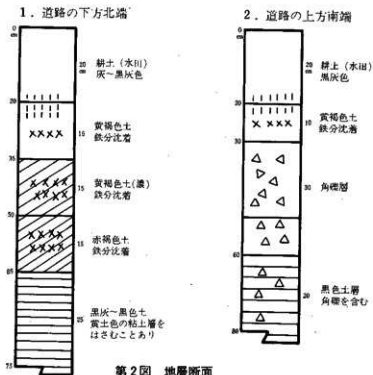
本調査地は松本市中山和泉地籍の和泉川沿いに位置し、主として和泉川による扇状地性の堆積物上に広がっている。周辺の地形は、東側の鉢伏山地と西側の中山丘陵、その間に発達した狭い断層谷状の谷底からなっている。谷底は推定断層線に沿って北西から南東に延びている。この谷底に迫る東西の山地の山麓線は極めて対照的であるが目につく。すなわち、中山丘陵の側が直線状で急傾斜を示すのに対し、鉢伏山地の側は屈曲性に富み、多くの支脈の尾根と谷を発達させている。更にこの谷は北地原や和泉で見えるように、崖錐性・扇状地性の堆積物によって埋められ、その平均傾斜は6度から10度を越え、広い面積の山麓傾斜地を形成している（この地形面には遺跡が多い）。

本調査地は、この山麓傾斜地の末端に位置し、市立考古博物館の載る島内集落の平坦面（分水界）の北斜面に当たる。山麓傾斜地面は、すでに和泉川やこれと合する河流により、浸食（一部堆積）を受けているので、調査地も中山丘陵や谷底からは台地状に、和泉川の上流からは扇状地に見える。

和泉川は現在山麓傾斜地の北側、弥生前山の山脚を西へ流れているが、上流での浸食と下流での堆積が盛んで、その扇頂をだんだん下流へ移動させている。調査地の載る扇状地の扇頂は、調査地から上流500mにあり、流れの方向は地下の砂礫層からN70°Eと見られる。一方最も新しい扇状地は和泉橋（調査地より東100m）付近を扇頂として広がり（方向N80°W）、すでに天井川を形成し谷底へ迫っている。このため調査地の扇状地は、旧堆積に一部新堆積を載せている。調査地の標高は630～640mで、谷底との比高は5mである。谷底と調査地の中心までの距離は130m、地形面の傾斜は約6度でかなりの勾配を示す。発掘前までは棚田（階段状の水田）として利用されていた。

2. 堆積層・湧水と遺跡

遺跡の載る扇状地は、遺跡から約500m上流に扇頂をもち、200m上流の弥生坂・河原田付近から展開を始め、調査地の末端付近の谷底で終っている。調査地東の中島公也氏はこの扇中央に当たる。ただこの中で一般の扇状地の堆積の概念と違うのは、豊富な湧水が到るところで見られることである。これは扇状地面の急な勾配と礫の多い地層によるもので、山地や上流からの伏流水や浸透水の現れと見られる。実際に、和泉地籍にある棚田（階段状の水田）では、上手側に湧水の集排水溝をもって、最上流の上和泉遺跡の調査地でもこの現象を見ることが出来る。また集落内では石積みの段下に、飲用や洗用の井戸を設けてあるのが見られる。



調査地の上方に隣接する中島公也氏宅前の池も、用水池として集水されたもので、豊富な水が見られる。したがって遺跡の発掘においても、湿性域や湧水域が現れ、この周辺には黒灰~黒色土の堆積層が多く見られる。これは恐らく湿地性植物を含む腐植土と考えられ、調査地周辺の谷底に臨む、は場整備中の土層にも、この状態が広く見られる。

第2図-1は道路下方の発掘地の北端近くで見られた地層の断面である。上部の水田の影響を受けたと思われる層を除き、黒灰~黒色土の堆積が見られる。この層は発掘地の北側と南側に分布し、縄文期の住居跡や遺物が見つかった。この黒灰~黒色土層には場所により砂・細礫が含まれている。

また、発掘地の中央には、前記の黒灰~黒色土層に挟まれ、北東側を上流とし、南西側を下流とした砂礫層が現れた。明らかに河床礫で流れの方向はN70°E、河床の幅は上流で3m、下流で多少狭くなり2mとなっている。和泉川からの流路(河道)を示し、左岸側は直線的で砂礫の分布は、砂、中・細礫を中心に大礫を混じえている。右岸側はN70°・40°・30°Eと屈曲を示し、砂礫の分布は中礫を中心に、細礫・大礫を混じえている。

河床礫層や黒灰~黒色土層に含まれている礫の種類は、上流の山地のほとんどを占める石英閃緑岩とそのフォルンフェルスである。

礫の形は角礫に近い鈍角礫の大礫(最大径25×20:30×20cm)に対し、中・細礫は角礫に近い歪

角礫に、亜円礫も混じえている。

黒灰～黒色土層と河床礫層の堆積関係は、時代的に余り隔たりがなく、河床礫層の方が多少遅れているように見える。

道路上方の発掘地は、中島公也氏宅前の用水池に続く、棚田の一部である。第2図-2はこの発掘地の南端に近い場所の地層断面である。堆積層は黒色土と礫層からなり、礫層は一部に河床礫が含まれているが、大部分運び込まれた埋め石と見られ、その径が大きい。特に北半分が目立ち、その下で縄文期の遺構・遺物が見つまっている。埋め石は恐らく後になって、地盤改良のために入れられたものであろう。

3. 地形の形成と遺跡

まず遺跡・遺物の載った旧小扇状地の堆積が考えられる。縄文期の生活は、この堆積層の安定の上に営まれたものであろう。その後和泉川の河道の移動と上昇は、堆積層への伏流水の浸透を促し、各所に湧水の増加を見るようになり、生活の場としては不適当となったものと思われる。湧水による湿地の増加は、植生を増し、現在見られるような腐植土（黒灰～黒色土）の生成の一因となったともいえる。

埋め石・埋め土は恐らく水田化（棚田）に伴うもので、中世以降のものと考えられる。

和泉橋付近を扇頂とする最も新しい扇状地堆積は、ますます河道を高めることとなり、伏流水を調査地の方向へ向けている。このため現在の河道に近い、発掘地の北部や、中島公也氏宅周辺に影響を及ぼしている。また黒色土層より上の地層は、縄文期以後の堆積と水田の造成時のものと考えられる。

第2節 周辺遺跡

本遺跡が位置する中山地区には数多くの遺跡がある。『長野県史』によれば13遺跡、61古墳の遺跡が記載されている。近年、発掘調査が増加し、次第にその様相が明かになりつつある。以下、時代を迫って周辺遺跡を概観していくこととする。

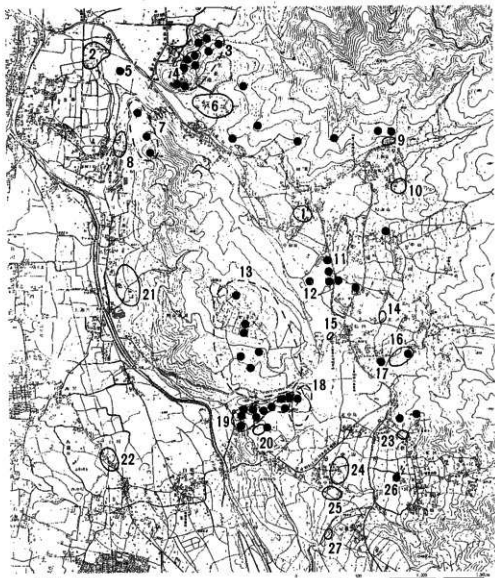
旧石器時代 中山地区では有舌尖頭器を含む尖頭器がいくつか採集されている。このうち、旧・中山考古館の収蔵資料の中には、近隣の弘法山古墳の丘陵で採集されたものもみられ、本遺跡出土品と併せて注目される。

縄文時代 現在までの調査の結果からみると、古くは早期の押型土器の時期に人々の生活の痕跡が認められる。坪ノ内、向畑、南中島、深沢の各遺跡より遺物が出土しているが、遺構は検出されていない。早期末から前期初頭では、坪ノ内、埴原、生妻、向畑で遺物が出土している。特に、坪ノ内土器集中区からは東海系の土器を伴い多くの資料が出土している。遺構は各遺跡で数基の土坑が検出されている程度である。前期の遺物は、埴原、坪ノ内、南中島などで出土している。中期初頭では埴原、坪ノ内、南中島、大久保で遺物が出土し、向畑では8軒の住居址が調査されている。中期中葉では、坪ノ内で多量の土器が出土したのをはじめ、南中島、大久保、埴原などで遺物がみられる。遺構の検出例は少ない。中期後葉では、坪ノ内6軒、深沢2軒、南中島21軒、生妻2軒、弥生前21軒など各地に集落が営まれるようになり遺物の出土量も多くなる。後期では坪ノ内で17軒の住居が調査されている。晩期の遺物はほとんど確認されていない。

弥生時代 弥生時代の遺物は過去数点しか出していない。向畑からは石包丁、磨製石鎌が出土しており、平成元年度に発掘調査した生妻からは、弥生後期の住居址が1軒検出された。今後も、調査によっては増える可能性がある。

古墳時代 中山地区にある古墳群を総称して中山古墳群と呼んでいる。中山丘陵の北端には弘法山古墳がある。4世紀中ごろに築造された前方後方墳と考えられているが、築造時期については諸説もあり確定されていない。和泉川を隔てた丘陵には、中山36号墳がある。発掘調査によって、半三角縁神獸鏡1、壺形土器、鉄器などが出しており4世紀後半の築造と考えられている。この他に、中山36号墳の周辺に棺護山古墳群、中山霊園の周辺に鉢形ヶ原古墳群、西越古墳群、その南側に坪ノ内古墳群、向畑古墳群がある。向畑古墳群は古墳時代中期の古墳群で、他の後期群集墳とは性格を異にすると考えられる。さらに東山山麓にも後期を中心とした古墳が点々としている。また、向畑遺跡では、古墳時代前期の住居址が57軒検出されており注目される。

奈良～平安時代 考古博物館の脇には推定信濃牧監庁跡が発見されており、今後の調査によっては同時期の資料が増える可能性がある。



●印 古墳

- | | | |
|-----------------|-------------------|-------------------|
| 1. 弥生前遺跡 (縄) | 10. 和泉遺跡 (縄・古) | 19. 坪ノ内、向畑古墳群 (古) |
| 2. 平畑遺跡 (弥・平) | 11. 小丸山古墳 (古) | 20. 坪ノ内遺跡 (縄) |
| 3. 檜灘山古墳群 (古) | 12. 柏木古墳 (古) | 21. 瀬黒遺跡 (縄) |
| 4. 中山36号墳 (古) | 13. 飯形ヶ原古墳群 (古) | 22. 白川遺跡 (縄) |
| 5. 弘法山古墳 (古) | 14. 地原北遺跡 (縄) | 23. 町村遺跡 (縄) |
| 6. 生妻遺跡 (縄・平) | 15. 樺定 牧監行跡 (奈・平) | 24. 南中島遺跡 (縄) |
| 7. 中山北尾根古墳群 (古) | 16. 山影遺跡 (古) | 25. 深沢遺跡 (縄) |
| 8. 山行法師遺跡 (縄) | 17. 小山下古墳 (古) | 26. 鉦塚 (中) |
| 9. 宮平八幡宮裏山遺跡 | 18. 向畑遺跡 (縄・古) | 27. 古里飯遺跡 |

第3図 周辺遺跡

第3章 調査結果

第1節 調査の概要

(1) 遺跡の位置と調査地点

本遺跡は松本市の南東、中山地区に所在し和泉川と旭原川の合流地点付近に位置している。調査地点は、和泉川によってつくられた扇状地の扇端にあたり、東から西へ比高差4.2mで傾斜している。本遺跡が発見される端緒となったのは、十数年前に調査地北側を流れる和泉川の河床工事の際に多量の遺物が出土したことにある。現地表面から遺物の発見された層位までは4mほどのレベル差があり、今回は遺構が破壊されるおそれがないと判断されたため和泉川周辺部の調査は行わなかった。

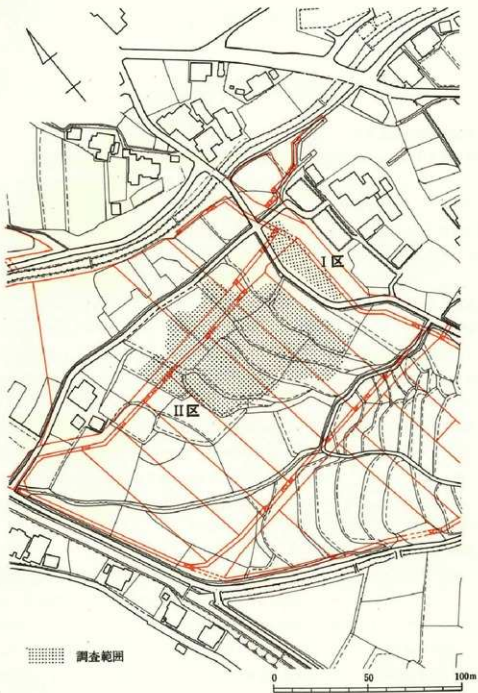
(2) 調査の方法

調査範囲の選定は、試掘調査の結果を考慮しながら重機により先行トレンチを入れて決定した。調査区は、南北に走る道路を挟んで東側を1区、西側を2区と設定した。現状は水田となっており遺構面までの深さは、1区が45～50cm、2区では50～65cm下げたレベルとなっている。検出作業は、地山が明褐色の二次堆積ローム層である2区中央部においては遺構が掘えやすかったものの、他の地点は暗褐色土中で掘えなければならず非常に困難であった。住居址番号に欠番があるが(3、8、26号住居址)、検出時では住居址と認識されたものの掘り下げ時において他遺構、もしくは遺構でないかと判断されたものである。測量については、2区に設定した基準点から3m間隔に直行する線を振り、調査地全体を3×3mのメッシュで覆い調査地内の求める位置を基準点からの方向と距離によって表現できるようにした。

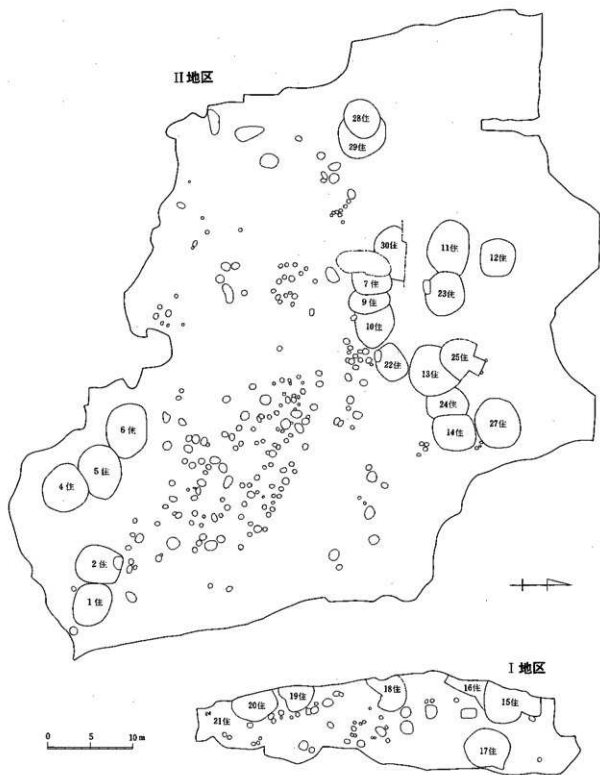
(3) 遺構・遺物の概要

今回の調査で検出された遺構は、住居址27軒、土坑275基である。全体的に遺構の遺存状況は悪く、また暗褐色土を掘り込んで構築されているため、検出作業は困難であった。住居址は、すべて縄文中期～後期のものである。縄文中期の住居址は、後業のもので円形プランを呈する。後期のものは、いわゆる柄鏡形を呈すると思われる住居が3棟ある。土坑は特に2区に集中してみられ、そのほとんどが円形・楕円形プランを呈する。時期は、ほぼ住居址の時期に平行するとみられるが、第1号・2号・3号土坑は中世～近世の火葬墓である。

出土遺物は、上記の遺構および包含層より縄文土器、石器、土製品などの出土がみられたが、特に土器は小片が多く、遺構内から出土したものは少ない。その中でも、第20号住居址からは、縄文中期後半の比較的良好な資料が得られている。石器では、2区検出面より有舌尖頭器が出土しており注目される。



第4図 調査範囲



第5图 全体图

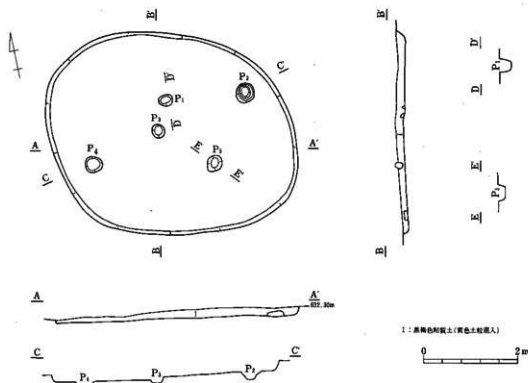
第2節 遺構

1 住居址

第1号住居址 (第6図)

調査地II区の南東隅に位置し、西隣には第2号住居址がある。遺構は褐色土中より構築されており、覆土も暗色のため検出は困難であった。規模は長軸5.2m、短軸4.3mを測り、東西に長い。平面形は不整楕円形を呈し、床面積は17.6㎡を測る。壁はほぼ直に掘り込まれており、残存壁高は15~20cmであった。覆土は一層で、黄色土粒が混入した黒褐色の粘質土である。ピットは総数5個検出された。P₂とP₄は位置的にみて柱穴に相当するかもしれないが、柱痕は確認されなかった。またP₃から若干量の焼土が確認されたが、炉址らしき掘り込みは全く見られなかった。

出土した土器の量は非常に少ない。中期初頭の破片1点の他は、中期中葉と後葉の土器が混在しており、時期決定は困難である。

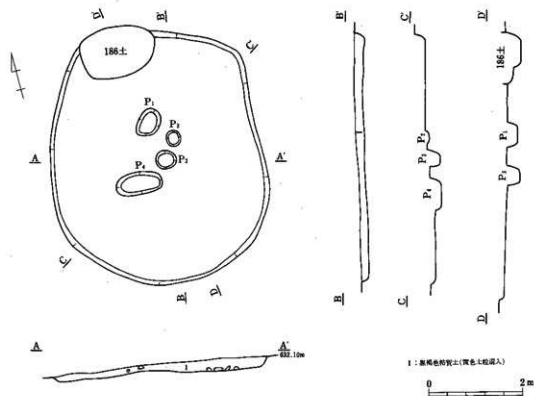


第6図 第1号住居址

第2号住居址 (第7図)

調査地Ⅱ区の南東隅に位置し、北西の隅を第186号土坑に切られる。本址も第1号住居址と同じく検出は困難であった。長軸5.4m、短軸4.6mの規模をもち、隅丸不整形長方形のプランを呈する。壁はほぼ直に掘り込まれており、最大壁高は28cmを測る。しかし西側は大きく削平を受けているため、遺存状態が悪い。床面は石英閃緑岩が混入する二次ロームを固めたものであり、床面積は19.2㎡を測る。覆土は一層で、黄色土粒が混入した黒褐色粘質土であった。ピットは中央部に4個集中して発見された。そのうちP₁は一番大きな規模(100×50、-28cm)をもち、楕円形を呈する。埋土中に炭化粒がみられたが、炉址とは言い難い。柱穴に相当するようなピット、炉はともに検出されなかった。

出土土器の量は少ない。中心になると思われるのは中期後葉のものだが、明確な時期が求められる破片はわずかである。器種では深鉢が主体である。他に早期末、前期後葉、中期中葉の破片が少量混在している。本址の時期は出土遺物より、縄文時代中期後葉曾利Ⅲ式期に比定される。

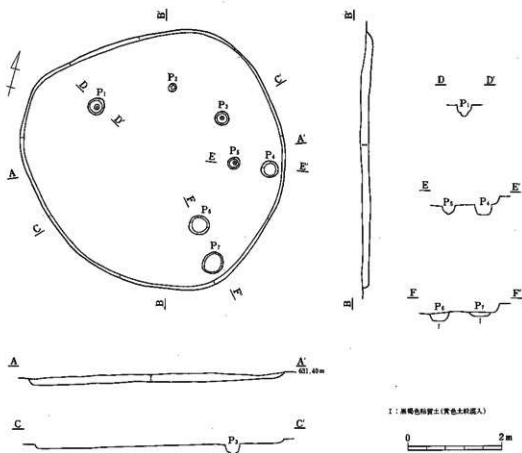


第7図 第2号住居址

第4号住居址 (第8図)

調査地II区の南東部に位置し、第5号住居址の南東壁をわずかに切る。長軸6.4m、短軸5.6mを測る不整形円形を呈す。壁は全体的に緩やかな傾斜で掘り込まれているが、遺存状態は良くなく残存壁高8~20cmを確認した。床面はわずかに西へ傾斜しており、現況での床面積は23.0㎡を測る。覆土は半層で黄色土粒混入の黒褐色土である。ピットはP₁~P₇の7個が検出されている。位置的にみて全てが柱穴に該当するものと考え。炉の痕跡はみられなかった。

出土した土器の量は非常に少ない。中期後葉のものが主体で、中期中葉及び後期後葉のものが若干混在する。本址の時期は出土遺物より、縄文時代中期後葉曾利I式期と推定する。

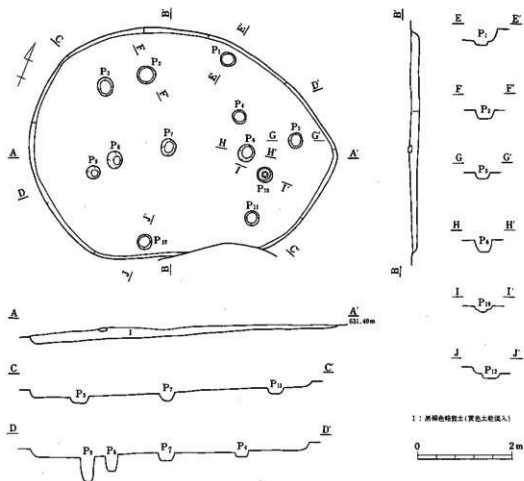


第8図 第4号住居址

第5号住居址 (第9図)

調査地II区の南東部に位置し、第4号住居址に南東壁の一部を切られ、第6号住居址の東壁をわずかに切る。規模は長軸6.6m、短軸4.8mを測り、不整楕円の平面形を呈する。床面積は現況で23.5㎡を測った。最大壁高は24cmを測るが、斜面上の南東側は浅い。覆土は一層で黄色土粒混入の黒褐色土であった。発見されたピットは12個 (P₁~P₁₂) あり、P₇以外は柱穴と考えられる。P₇は位置的にみれば炉の可能性もあるが、それらしい痕跡は確認されなかった。

出土した土器の量は非常に少ない。中期後葉のものが主体で、中期中葉のものがわずかに混在する。本址の時期は出土遺物より、縄文時代中期後葉曾利II式期と推定される。

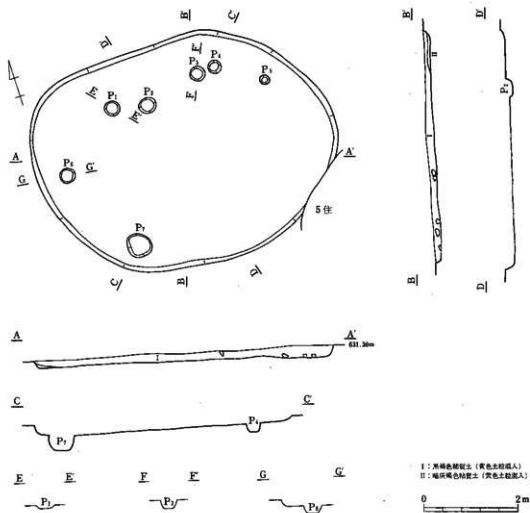


第9図 第5号住居址

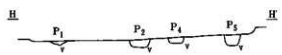
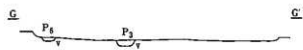
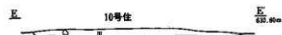
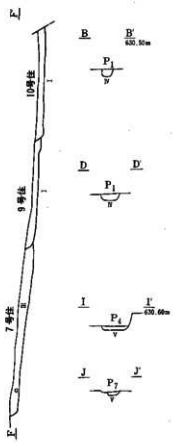
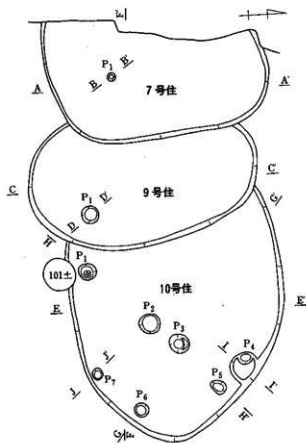
第6号住居址 (第10図)

調査地Ⅱ区の南東部に位置し、第5号住居址に南東壁を切られる。褐色土を掘り込んで構築しているため、本址の検出も困難であった。規模・平面形は長軸6.6m、短軸4.8mの不整楕円形を呈し、床面積は23.7㎡を測る。壁の遺存状態は悪く、残存高は24cmであった。覆土は黒褐色粘質土と暗灰褐色粘質土の二層で、ともに黄色土粒が混入している。住居内の施設はP₁～P₇のピットが見つかった。いずれも柱穴に比定されると考えられるが、南東部では検出されていない。炉は発見されていない。

出土した土器量は非常に少ない。主体となるものは中期後葉であるが、中期中葉のものがわずかに混在する。器種では深鉢の他、香炉型土器の破片などがみられる。本址の時期は縄文時代中期後葉曾利Ⅱ式期と推定される。



第10図 第6号住居址



- I: 黑褐色砂質土 (黃色土線記入)
- II: 暗灰褐色砂質土
- III: 黑褐色砂質土 (黃色土粒・小塊混入)
- IV: 暗褐色粘質土
- V: 黑褐色砂質土



第11圖 第7・9・10号住居址

第7号住居址 (第11図)

調査地Ⅱ区の中央部に位置し、第9号住居址を切り、西側半分を掘乱によって破壊されている。そのため規模は現況で長軸4.6m、短軸2.6m、床面積9.2㎡を確認するのみであった。平面形は不明であるが、不整楕円形を呈するのではないかと推定される。覆土は黄色土粒が混入する黒褐色砂質土と暗灰褐色砂質土の二層で、ややなだらかに掘り込まれた壁は最大高24cmを測る。住居内の施設はピット1個が検出されたのみで、炉などは発見されなかった。

出土した土器は微量で、時期決定は困難であるが、縄文時代中期後葉と推定される。

第9号住居址 (第11図)

調査地Ⅱ区の中央部に位置する。遺構は灰黒色土中で把握したが、土色の差が微妙で検出作業は困難であった。他遺構との切り合い関係は西側を第7号住居址に掘り込まれ、東側の第10号住居址を切っている。平面形は長軸4.9m、短軸2.6mを測る楕円形を呈するものと考えられる。現況床面積は9.7㎡であった。壁の遺存状況は良くないが、ややなだらかに掘り込まれており、最大壁高は16cmを測る。覆土は黄色土粒混入の黒褐色砂質土である。床面からはピット1個の他は、何も発見されていない。

出土遺物は極めて少なく、深鉢1個体の他には破片が数点あるのみである。本址の時期は遺物より、縄文時代中期後葉曾利Ⅱ式期と推定される。

第10号住居址 (第11図)

調査地Ⅱ区の中央部に位置し、第9号住居址に西側を、第101号土坑に北壁の一部を切られる。本址は黒灰色土中より構築されているため、検出は困難であった。平面形は楕円形を呈するものと推定される。規模は長軸方向で4.3m、短軸4.6m、現況床面積15.6㎡を確認した。壁はやや外傾しており、最大壁高は24cmを測る。覆土は単層で、黄色土粒と小礫の混入する黒褐色砂質土である。住居内の施設はP₁～P₇のピットが確認されている。そのうち壁際に見つかったP₁・P₇・P₈・P₅・P₆は柱穴に相当するものと考えられる。P₂から少量の炭化物が出土したが、炉に該当する施設は確認されなかった。

出土した土器の量は非常に少ない。中期中葉と後葉の土器が混在し、後者がやや多い。本址の時期決定は困難である。

第11号住居址 (第12図)

調査地Ⅱ区の中央部やや北寄りに位置する。本址は黒褐色土を掘り込んで構築しているため、検出は困難であった。炉址の発見でその存在を確認し、トレンチ調査により規模等を把握した。東壁を第23号住居址に切られており、現況床面積は24.7㎡を測った。平面形は長軸6.2m、短軸4.9mの不整楕円形を呈する。覆土は一層で、暗灰茶褐色砂質土であった。住居内の施設はピットが東側で7個検出された。位置からP₁・P₄・P₆及びP₇が柱穴となろう。また炉は中央やや東寄りに設置されている。規模80×76cmを測る石囲炉であり、南に60×40cmの石が、残る三方には30～40cmの石

が置かれていた。これら緑石には被熱痕がわずかに認められ、炉内の埋土には少量の焼土が混入していた。

出土した土器の量は豊富であったが、無文のものが多い。早期末葉から後期後葉までの破片が混在しており、時期決定は困難である。破片のなかでは、中期中葉と中期後葉のものが多い。

第12号住居址（第13図）

調査地Ⅱ区の中央部南側に位置する。規模は長軸4.5m、短軸4.2mで、床面積15.2㎡を測る不整楕円形のプランを呈している。掘り込みは急で、その深さは32cm程度である。覆土は二層で暗灰茶褐色砂質土と鉄分が多量に混入した暗赤褐色砂質土であった。P₁～P₁₀のビットが発見されており、P₁・P₃～P₆・P₈・P₁₀～P₁₃は柱穴に相当すると考える。P₁₄から炭・焼土が検出されたが、炉石などは見られず、炉の掘り方とするのは難しい。

出土した土器量は多い。中期中葉のものが若干混在するが、中期後葉のものが主体を占めている。曾利系のものほとんどで、加曾利E系の混入は見られない。器種別では深鉢が主体で、把手の資料も多い。本址の時期は出土遺物より、縄文時代中期後葉曾利Ⅱ～Ⅲ式期に比定される。

第13号住居址（第14図）

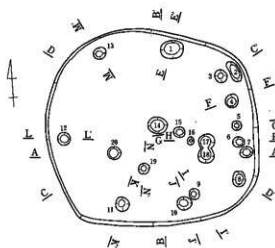
調査地Ⅱ区の中央部のやや北東寄りに位置する。北西の隅を第25号住居址に切られ、第24号住居址を切る。本址は大きく削平を受けており、遺存状況は悪い。また暗灰色砂質土を掘り込んでいるため、検出作業は困難であった。長軸は現況で6.4m（復元では7.8m）、短軸4.3mの規模をもち、楕円形のプランを呈する。深さは確認された部分で22cm、床面積は現況で26.7㎡を測った。覆土は暗灰褐色の砂質土であった。施設は11個のビット（P₁～P₁₁）が主として東部に集中して発見されている。そのうちP₁・P₄・P₁₀・P₁₁は柱穴と想定される。炉は見されていない。

土器の量は少なく、本址に伴うものの他、第25号住居址から混入したものが多くみられる。本址の時期は出土遺物より、縄文時代中期中葉勝坂Ⅲ式期と推定される。

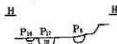
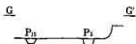
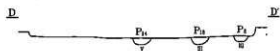
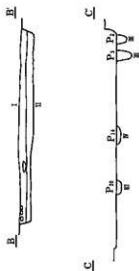
第14号住居址（第15図）

調査地Ⅱ区の北東部に位置し、第24号住居址の東側を切る。長軸5.1m、短軸4.3mの隅丸長方形を呈し、床面積は18.3㎡を測る。本址は暗灰色砂質土を掘り込んでいるため、検出作業が困難であった。また大きく削平されており、壁の遺存状況が悪く、深さ8cmを確認するのみであった。覆土は黒褐色砂質土である。住居の施設としてビットはP₁～P₃₁の31個が検出されている。炉は石囲炉で、ほぼ中央部に設置されている。径15～20cm大の石が西側に残っており、落ち込み内からは焼土・炭化物が出土した。

出土した遺物の量は少なく、器形を復元できるものはない。本址の時期は出土遺物より、縄文時代中期後葉曾利Ⅱ式期と推定される。



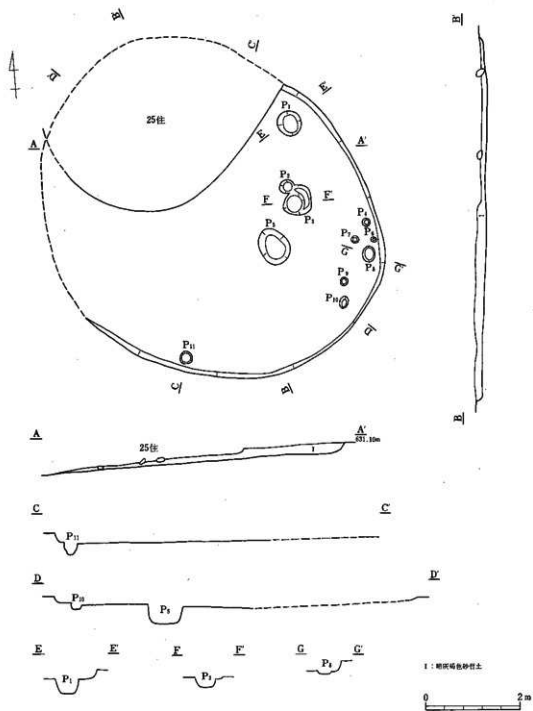
■数字はPit番号を示す。



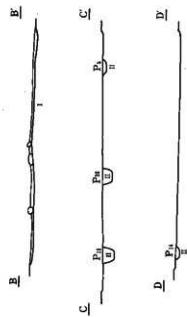
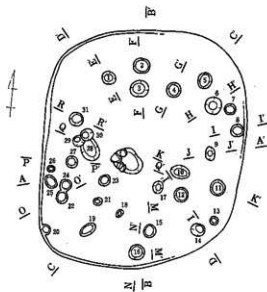
- I: 暗赤褐色砂質土
- II: 暗赤褐色砂質土 (熱分多量混入)
- III: 暗褐色砂質土
- IV: 暗赤褐色砂質土 (熱分少量混入)
- V: 暗赤褐色砂質土



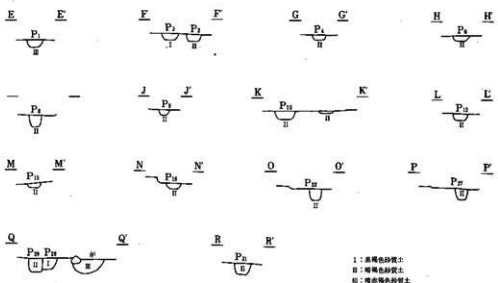
第13図 第12号住居址



第14图 第13号住居址



*数字はPit 番号を示す。



1 : 黒褐色砂質土
 2 : 暗褐色砂質土
 3 : 暗赤褐色砂質土



第15図 第14号住居址

第15号住居址 (第16図)

調査地Ⅰ区の北西部に位置し、第16号住居址の北部を切っている。また西側の約1/3が調査区外にかかっているため明らかではないが、柄鏡状のプランを呈するものと思われる。規模は長軸6.3m、短軸は現況で主体部4.4m、柄部2.5mを確認している。覆土中には径50cm大の礫と鉄平石の小片が多数入っており、床面積は現況20.7㎡を測った。確認された壁は8cmと浅い。ピットは住居外に1個(P₁)、住居内に4個(P₂~P₅)発見された。炉は石囲炉で住居中央部に設置されている。規模は108×96cmと大きく、最大で60×70cmの石を使用している。

出土した土器の量は極めて少なく、中期後葉と後期前葉の破片が混在する。本址の時期は出土遺物より、縄文時代後期前葉の堀之内Ⅰ式期と推定する。

第16号住居址 (第17図)

調査地Ⅰ区の北西部に位置し、第15号住居址に北側を切られる。また西側の半分以上が調査区域外にかかっているため、形状は不明であるが、確認部分から判断して柄鏡状のプランを呈するものと考えられる。現況で長軸5.1m、短軸は主体部2.8m、柄部1.9m、床面積8.0㎡を測った。床面には径50cm前後の礫が入っている。確認された掘り込みはごく浅い。住居外でピット1個が見つかった。

出土した土器は無文の小片が数点出土したのみで、時期は不明である。

第17号住居址 (第17図)

調査地Ⅰ区の北部に位置し、東壁の一部が調査区域外にかかる。本址は暗黒褐色土を掘り込んで構築しており、更に湧水が多かったため、検出作業は困難であった。規模は長軸5.1m、短軸は現況で4.7mを測り、不整形のプランを呈している。床面積は19.5㎡を確認した。覆土は一層で暗青褐色粘質土を呈する。覆土中及び床面上から多量の礫が出土しているが、その在り方からみて人為的に投棄された可能性が窺える。なお炉など本址に伴う施設は発見されなかった。

出土した土器量は非常に少なく、若干中期後葉の混在がみられる。本址の時期は縄文時代後期前葉堀之内Ⅰ式期と推定される。

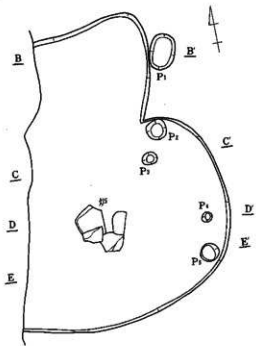
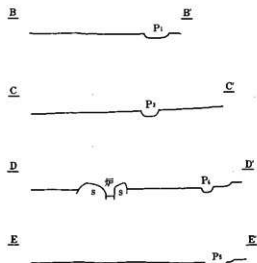
第18号住居址 (第18図)

調査地Ⅰ区の中央西側に位置し、西側の一部が調査区域外にかかっている。平面形は明らかではないが、おそらく柄鏡状になるものと推定される。規模は長軸5.4m、短軸は現況で主体部4.3m、柄部1.8m、現況床面積は12.8㎡を測る。残存している壁高は12cmで、覆土は暗褐色粘質土である。覆土中からは多数の礫が確認されており、柄部にあたる側に径50cm前後を測るものが多い。ピットは7個(P₁~P₇)発見されており、そのうちP₁・P₂・P₄・P₆・P₇は柱穴と想定できよう。

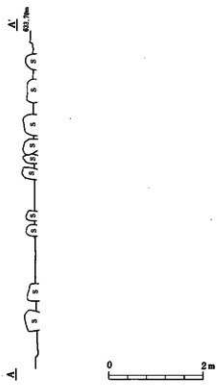
出土した土器は微量で、時期決定は困難であるが、縄文時代中期後葉と推定される。

第19号住居址 (第19図)

調査地Ⅰ区の西端に位置する。調査区域外にかかるため東側の約2/3、床面積にして9.0㎡を確認した。規模は長軸方向で4.2m、短軸で現況3.2mを測り、平面形は不整形を呈するものと推定され

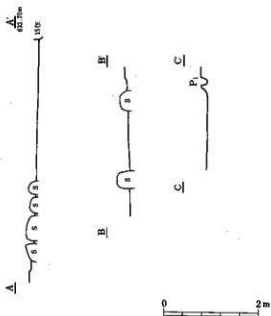
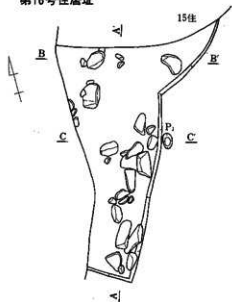


出土状况

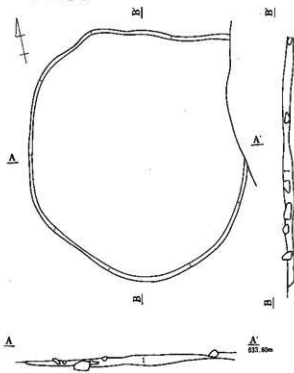


第16图 第15号住居址

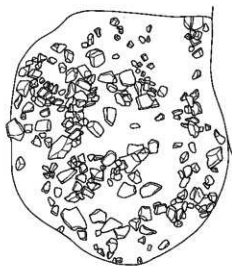
第16号住居址



第17号住居址



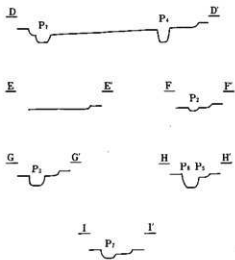
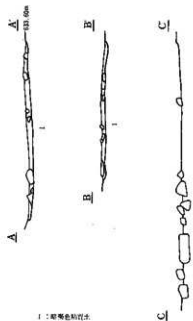
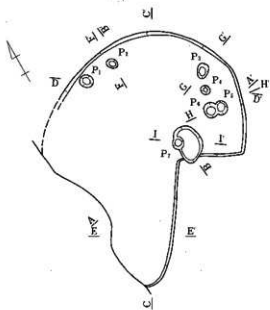
埋土土状况



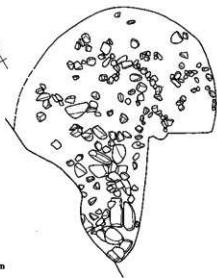
1: 埋土颜色标度.



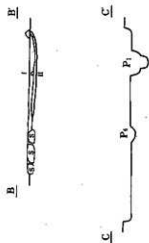
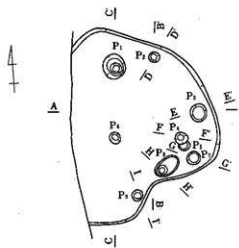
第17图 第16·17号住居址



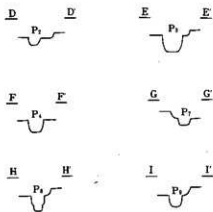
壤土状泥



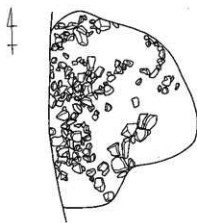
第18图 第18号住居址



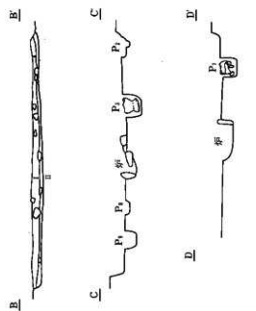
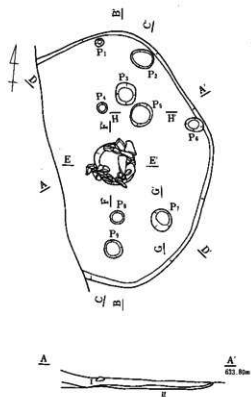
I: 暗褐色粘質土
II: 灰褐色粘質土



掘出土状況



第19図 第19号住居址

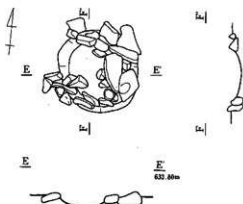
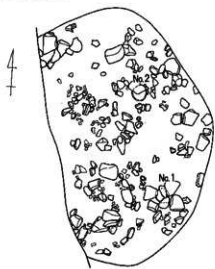


I: 灰褐色砂质土
II: 灰褐色砂质土

0 2 m

遗物出土状况

炉址



0 2 m

0 1 m

第20图 第20号住居址(1)

る。掘り込みは最大16cmとそれほど深くないが、覆土は二層で灰褐色粘質土の上に暗褐色粘質土が乗っていた。覆土中及び床面上からは多量の礫が確認されている。9個のピット（P₁～P₉）が発見されており、そのうちP₅・P₆を除くといずれもが柱穴に相当するものとする。炉は確認されなかった。

出土した土器の量は非常に少ない。主体と思われる中期後葉のもの他、中期中葉及び後期前葉のものが少量混在する。本址の時期は出土遺物より、縄文時代中期後葉曾利Ⅲ式期と推定される。

第20号住居址（第20図）

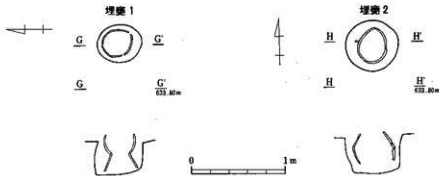
調査地Ⅰ区の西側の南寄りに位置する。調査区域外にかかるため、現況床面積12.8㎡を確認するのみである。長軸5.5m、短軸は現況で3.5mを測っており、平面形は不整形円形になるものと思われる。壁の残存高は28cmを測り、覆土は灰褐色粘質土の上に暗褐色の粘質土が乗る二層であった。ピットは9個（P₁～P₉）検出されている。位置からP₁・P₂・P₆及びP₉が柱穴となろう。P₅・P₇内からはそれぞれ埋甕が発見されており、方向は前者（No 2）が正位に、後者（No 1）は上半部を逆位に埋めてあった。P₇の底面には拳大の小礫が円形に組まれており、埋甕はその上に設置されていた。埋甕内の埋土からは、何も出土していない。また炉は中央にあり、規模120×110cmの石囲炉で、深さ20cm掘り込まれていた。炉は拳大～人頭大の比較的小きな礫を組み合わせてあった。

出土した土器の量は非常に多い。中期後葉末が主体で、中期中葉と中期後葉初段階のものが混在する。器形別では深鉢が主体で、それに伴う把手の資料が多く存在する。土器の系統をみると唐草文系が主体を占め、若干の加曾利E系が混在する。本址の時期は、出土遺物より縄文時代中期後葉曾利Ⅱ式の新しい段階に比定される。

第21号住居址（第23図）

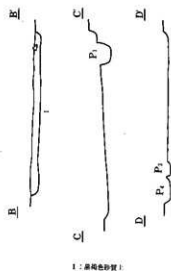
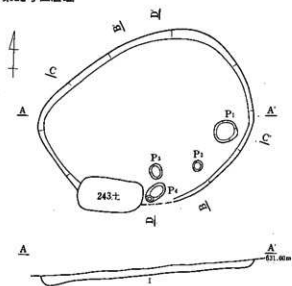
調査地Ⅰ区の北端で炉が確認されたことにより、その存在が判明した。52×44cmの規模をもつ石囲炉である。しかし住居としての規模・平面形は全く不明で捉えることができなかった。

出土した土器は微量で、時期を決定できるものも少ない。本址の時期は遺物より、縄文時代中期

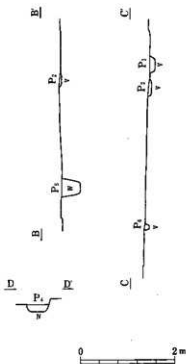
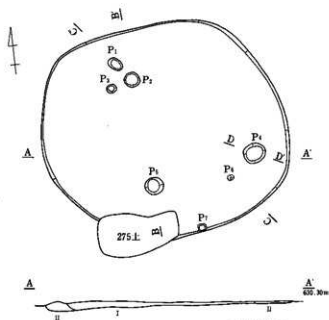


第21図 第20号住居址(2)

第22号住居址



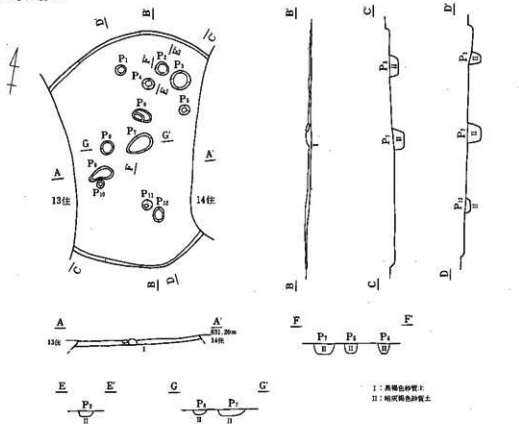
第23号住居址



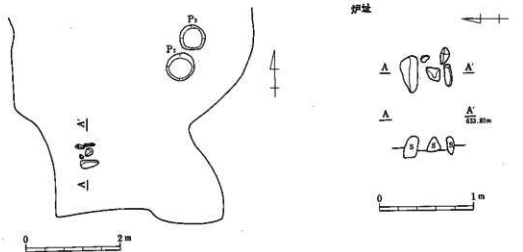
I: 黄褐色砂质土
 II: 绿泥质砂质土
 III: 灰绿泥质砂质土
 IV: 黄褐色砂质土
 V: 绿泥质砂质土

第22图 第22·23号住居址

第24号住居址



第21号住居址



第23图 第21・24号住居址

後葉曾利Ⅱ～Ⅲ式期と推定される。

第22号住居址 (第22図)

調査地Ⅱ区のほぼ中央に位置し、北壁の一部を第243号土坑に切られる。本址の北に第13号住居址、西には第10号住居址がある。平面形は隅丸長方形を呈し、4.4×3.5mの規模をもつ。床面積は10.6㎡を確認した。壁はほぼ直に掘り込んであり、最大壁高は20cmを測る。覆土は一層で黒褐色砂質土であった。住居内の施設は4個のピット(P₁～P₄)が南東部に集中して発見された。炉は発見されていない。

土器の量は非常に少ない。中期後葉の中頃のもの为主体で、中葉および中期末のものが混在する。本址の時期は出土遺物より、縄文時代中期後葉曾利Ⅲ式期と推定される。

第23号住居址 (第22図)

調査地Ⅱ区の中央やや北西寄りに位置する。北壁の一部を第275号土坑に切れ、第11号住居址の東側を切る。長軸5.3m、短軸4.6mの不整楕円形を呈し、床面積は18.1㎡を測る。壁は最大で20cmを確認したが、全体に削平されており、遺存状況は悪い。覆土は二層で黒褐色砂質土と暗灰褐色土である。床面は地山の二次堆積ロームを固めてあったが、軟弱だった。ピットはP₁～P₇の7個が検出されている。炉は検出されていない。

出土遺物は、土器小片が3点、凹石1点のみで、本址の帰属時期は不明である。

第24号住居址 (第23図)

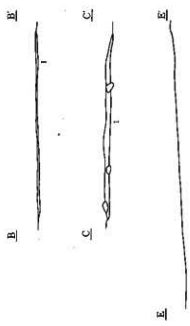
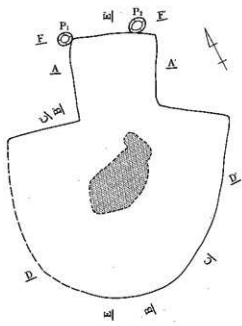
調査地Ⅱ区の中央やや北東寄りに位置する。第13号及び第14号住居址にそれぞれ西側と東側を切られており、全体の約2/3、床面積にして12.1㎡を確認した。平面形は不整形を呈するものと推定され、規模は長軸5.0m、短軸は現況で3.2mを測る。残存する壁は最大12cmを測った。覆土は一層で黒褐色砂質土である。床面は地山の二次堆積ロームを固めており、堅くしまっていた。住居に伴う施設はピットが12個(P₁～P₁₂)発見された。ピットの覆土は暗灰褐色砂質土である。炉は発見されていない。

出土した土器の量は極めて少なく、第13号住居址からの混入が多い。特殊なものとしては土器の蓋(第56図13)が1点存在する。時期を判別できるような破片が少なく、本址の時期を決定するのは困難であるが、縄文時代中期後葉曾利Ⅱ式期に比定されるものと考えたい。

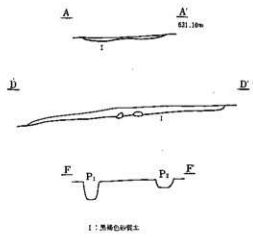
第25号住居址 (第24図)

調査地Ⅱ区の中央やや南寄りに位置し、第13号住居址の北西を切る。西側のプランは明確ではないが、平面形は柄籠状を呈すると推定される。規模は長軸5.6m、短軸は主体部4.7m、柄部1.8m、床面積17.9㎡を測った。覆土は黒褐色土の一層で、床面からは多量の礫が出土している。確認された掘り込みはごく浅い。住居の柄部外でピット2個が見つかった。床面の中央から焼土が108×100cmの範囲で確認されており、炉である可能性もある。

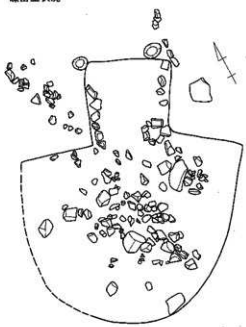
出土した土器は非常に少なく、第13号住居址からの混入と思われるものが大半を占める。住居址



掘出土状況



1: 黒褐色砂質土



第24図 第25号住居址

の形態をみると、中期末のものと同定されるが、その時期の土器はほとんど出土していない。本址の時期は前述の理由により、不明である。

第27号住居址（第25図）

調査地Ⅱ区の北東部に位置する。平面形は不整楕円形を呈し、規模は長軸5.9m、短軸5.3m、床面積は24.3㎡を測る。最大壁高は14cmであるが、壁の遺存状況はあまり良くない。覆土は暗褐色砂質土の一層であった。床面は南東側が堅くしまっていたが、北西側は軟質であった。本址に伴う施設はピットが16個検出されている。ピットは覆土が暗褐色砂質土のものと暗灰褐色砂質土のものに分かれる。炉は発見されなかった。

出土した土器は非常に少ない。中期後葉のものが主体を占めるほか、中期中葉が少量混在する。本址の時期は遺物より縄文時代中期後葉曾利Ⅱ～Ⅲ式期と同定される。

第28号住居址（第26図）

調査地Ⅱ区の中央部西側に位置し、第29号住居址を切る。長軸6.1m、短軸4.0mの不整楕円形を呈し、床面積は14.2㎡を測る。最大高28cmの壁はほぼ直に掘り込まれており、遺存状態は良好である。覆土は一層で黒褐色砂質土であった。住居内の施設はピットが3個（P₁～P₃）発見されている。P₂内の埋土にはわずかに焼土・炭化物の存在が認められたが、炉石等はみられなかった。

出土した土器は微量である。中期中葉のものが主体を占め、中期後葉の破片が少量混在する。本址の時期は、縄文時代中期中葉勝坂Ⅱ～Ⅲ式期と同定される。

第29号住居址（第26図）

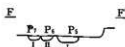
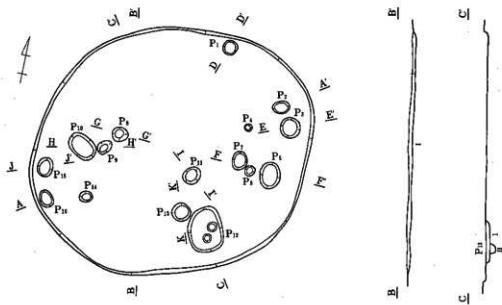
調査地Ⅱ区の中央部西側に位置する。第28号住居址に西側を切られており、床面積13.5㎡を確認した。規模は長軸方向で5.4m、短軸で現況3.8mを測り、平面形は不整円形となろう。しっかりした掘り込みをもち、最大壁高は24cmを測る。覆土は大・小礫が混入する暗褐色砂質土の一層である。ピットや炉など本址に伴う施設は検出されていない。

出土した土器の量は非常に少ない。主体を占める中期中葉のもの他、中期後葉の破片が少量混在する。本址の時期は、縄文時代中期中葉勝坂Ⅰ式期と同定される。

第30号住居址（第27図）

調査地Ⅱ区の中央に位置する。第7号住居址と攪乱によって南側を破壊されており、また北側もプランが検出できなかったため、規模・平面形ともに明らかではない。現況で床面積15.3㎡、長軸6.3m、短軸3.8mを確認したのみである。壁高は最大で24cmを測っている。ピットは7個（P₁～P₇）検出された。特にP₁からは埋土が発見されており、胴部以下を正位に埋めてあった。なおP₁の規模は70×70×20cmであった。炉は検出されなかった。

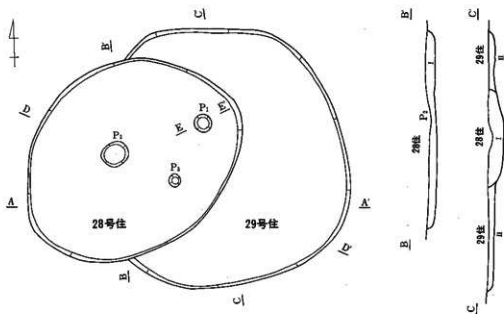
出土した土器の量は非常に少ない。中期中葉と後葉の破片が混在する。本址の時期は埋土土器の時期より縄文時代中期中葉と同定される。



I : 暗褐色砂質土
II : 暗灰色砂質土



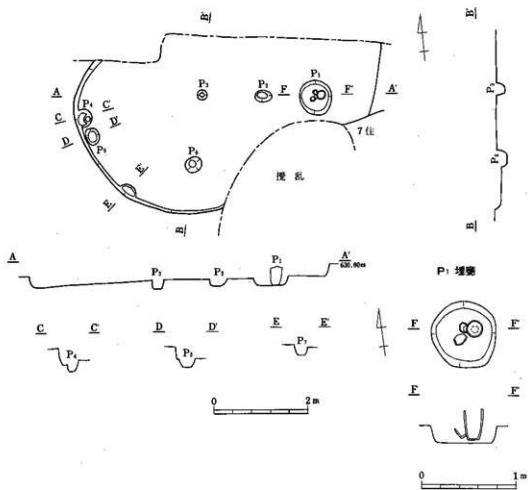
第25圖 第27号住居址



I : 黑褐色砂质土
 II : 暗褐色砂质土(大·小棚圈人)



第26图 第28·29号住居址



第27图 第30号住居址

2 土坑 (第28~30図)

本遺跡から検出された土坑は総計277基を数える。この中には、本来ピットとすべき径30cm以下のものも含まれているが、ここでは土坑として扱った。出土遺物から縄文時代中期、平安時代、近世の三時期がみられる。分布は1区43基、2区234基で2区中央部に集中している。

① 平面形態

円形、楕円形、方形、長方形、その他の形態がみられ、それぞれやや不整形なものが含まれる。このうち楕円形を呈するものが一番多く143基(51.6%)、次に円形93基(33.6%)、方形29基(10.5%)、長方形17基(6.1%)、その他12基(4.4%)の順になる。楕円形・円形を呈するものが非常に多い。

② 断面形態

断面形は、方形・長方形、半円形、台形、二段底がみられる。

A 方形・長方形を呈するもの…壁が垂直に近い角度(斜度85°~90°)で立ち上がるもの。

B 台形を呈するもの………開口部より底部径が小さく逆台形を呈する。

C 半円形を呈するもの………底面が丸底である。

D フラスコ形………袋状を呈し、検出面より下に最大径をもつもの。

E 二段底を呈するもの………二段の底になっているもの。

F その他………底面の凹凸がはげしいものや、上記のどの形態にもあてはまらないもの。

半円形を呈するものは122基(44.0%)、方形・長方形54基(19.6%)、台形32基(15.0%)、二段底19基(6.9%)その他40基(14.5%)でフラスコ状を呈するものは見られなかった。

③ 規模

長径で比較すると、最大336cm、最小24cmを測り、平均は130cmである。平面形態別の平均値をみると方形が96cm、楕円形72cm、円形52cmとなり、100cm前後からそれ以下になると円形及び楕円形を呈する傾向にある。

④ 遺物

土坑内より出土した遺物は、以下のようなのみみられる。

ア) 土器が出土したもの	110基	39.7%
イ) 平板状にあるいは角柱状の比較的大きな石を伴う	5基	1.8%
ウ) こぶし大以上の礫を1~10個伴う	121基	43.7%
エ) 骨・炭化物が出土したもの	14基	5.0%
オ) 何も出土しなかった	103基	37.1%

土坑内より土器が出土したものは、110基(39.7%)みられた。完形に近い土器を出土した土坑はなく、すべて破片資料である。埋土中に拳大以上の礫が多数伴う土坑は121基(43.7%)検出さ

れ、一番多くみられる。骨が出土したものは14基みられ、埋土上層に拳大以上の礫を多く伴うものが多い。

④ 特徴的な土坑

第1号土坑 1区中央部に位置する。規模は180×114cmの長方形のプランを呈する。本址中央部付近からは炭化材や焼けた骨が多量に出土しており、火葬墓とみられる。遺物は、覆土中より寛永通宝が出土していることから、本址の帰属時期は近世以降とみられている。

第108号土坑 2区中央部に第276号土坑を切って検出された。平面形は円形プランを呈し、規模は64×62cmを測る。断面形は二段底を示し、掘り方の壁面には拳大ほどの礫を人為的に組み合わせたような状況が見られた。遺物は、覆土中より縄文土器片が2～3点、骨が微量出土している。

第171号土坑 2区南東隅に位置する。平面形は不整形円形を呈し、規模は153×106cmを測る。埋土中の上部には10～20cm大の礫が多量に混入していた。遺物は、石棒（第64図2）・石匙（第58図23）・縄文土器片と骨片が少量出土している。石棒は被熱痕が確認され、割れて一部分のみ残存していた。本址からは、骨、石棒等が出土しており墓址の可能性が強い。

第217号土坑 本址は2区南東隅に検出された。平面形は不整形を呈し、規模は110×100cmを測る。断面形は二段底で、ピット状の落込みが2箇所みられた。覆土中には、拳大ほどの礫が多量にみられ、縄文土器小片が混在していた。本遺跡からは、他に11基このような土坑が検出されており注目される。



第28図 土坑配置図

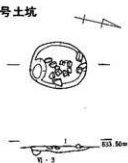
第1号土坑



第7号土坑



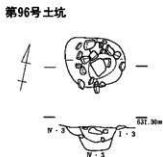
第32号土坑



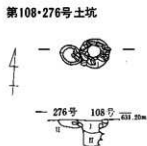
第95号土坑



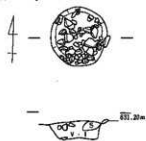
第96号土坑



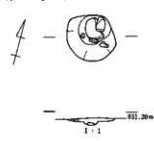
第108·276号土坑



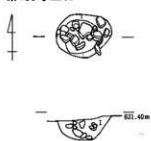
第114号土坑



第117号土坑



第135号土坑



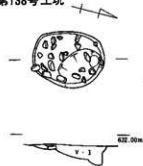
弥生前土坑基本土层

- | | |
|---------------|-----------|
| I: 暗褐色砂质土 | Ⅰ: 灰白色 |
| II: 暗灰褐色粘质土 | Ⅱ: 灰色+粒 |
| III: 暗灰黄褐色粘质土 | Ⅲ: 暗紫褐色+粒 |
| IV: 灰褐色砂质土 | Ⅳ: 灰白砂 |
| V: 黄褐色粘质土 | |
| VI: 黄褐色砂质土 | |

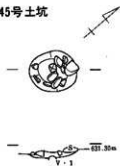


第29图 土坑(1)

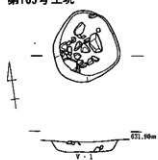
第138号土坑



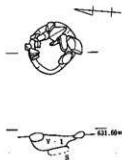
第145号土坑



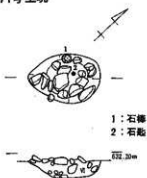
第165号土坑



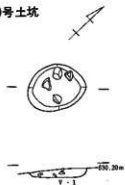
第170号土坑



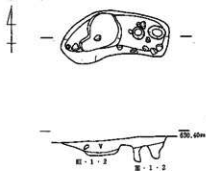
第171号土坑



第219号土坑



第217号土坑



第275号土坑



第30图 土坑(2)

第1表 土坑一覽表

番号	回	位置	平面形	規模 (cm)		断面形	時期	切合關係 > 切れる、< 切られる	備考
				長径×短径×深さ					
1	26	N 3-W 3	隅丸方形	180×114×14	F			火葬墓(炭、骨)	
2		S 15-WE 0	隅丸長方形	70×64×34	B			炭化物・礫多量、骨	
3		S 18-WE 0	不整楕円形	116×102×26	A			礫、骨、炭化物	
4		N 12-E 3	楕円形	46×40×16	B				
5		NS 0-W 6	楕円形	56×46×11	C			土器	
6		S 15-W 3	楕円形	92×76×15	A	縄文中期	>10坑	礫、土器	
7	26	S 3-W 3	不整方形	162×126×32	F	縄文中期		礫、土器	
8		S 3-W 6	楕円形	50×36×20	C				
9		S 3-W 6	楕円形	46×32×12	A				
10		S 15-W 3	隅丸長方形?	76×(62)×19	B		6坑<	土器	
11		S 3-W 3	不整楕円形	54×38×18	B				
12		S 6-W 3	不整楕円形	164×140×21	C			礫多量、土器	
13		S 6-W 3	不整方形	122×120×15	F			礫	
14		S 12-W 3	円形	28×26×10	C		>26坑	土器	
15		S 6-WE 0	円形	52×50×7	F				
16		S 9-W 3	不整楕円形	130×92×17	C			礫、土器	
17		S 6-W 3	楕円形	46×34×10	C			土器	
18		S 9-W 3	楕円形	52×42×9	F				
19		S 9-W 3	楕円形	34×28×9	C				
20		S 9-WE 0	円形	28×28×13	C				
21		S 9-WE 0	円形	26×26×7	C				
22		S 9-WE 0	楕円形	94×78×23	A			土器	
23		S 12-WE 0	楕円形	66×56×6	C			土器	
24		S 12-WE 0	不整楕円形	46×38×6	C				
25		S 12-WE 0	楕円形	38×34×8	C				
26		S 12-W 3	円形	56×48×9	C		14坑<		
27		S 12-W 3	円形	42×38×7	C				
28		S 9-W 3	円形	32×30×10	C				
29		S 9-W 3	楕円形	42×36×4	C				
30		S 9-W 3	楕円形	32×28×8	F				
31		S 15-W 3	不整楕円形	82×58×11	F				
32	26	S 15-W 6	楕円形	120×97×17	E			礫・土器多量	
33		S 12-W 6	不整形	130×54×21	C	縄文後期		礫、土器	
34		S 15-W 3	円形	42×42×10	C				
35		S 15-W 3	—	—				未掘	
36		S 15-W 3	楕円形	58×50×8	C				
37		S 15-W 3	円形	40×40×9	F			土器	

番号	図	位置	平面形	規模(cm)	断面形	時期	切合関係 >切る、<切られる	備考
				長径×短径×高さ				
38		S15-W3	円形	30×26×8	C			
39		S15-W3	隅丸方形	60×56×18	C			
40		S21-W3	不整円形	50×40×13	A			
41		S21-W3	不整楕円形	82×54×17	F			土器
42		S21-WE0	不整円形	38×34×11	B			
43		S21-WE0	不整円形	80×48×13	E			
44		S24-WE0	楕円形	46×38×15	C			
45		S24-W3	円形	66×64×24	B	縄文中期		土器
46		N3-E6	円形	54×48×22	C	縄文中期		礎、土器
47		N3-E6	円形	50×48×26	A	縄文中期		礎、土器
48		N3-E6	楕円形	60×50×32	C	縄文中期		礎、土器
49		N3-E9	楕円形	46×38×17	B			礎
50		S3-E18	不整長方形	124×114×—	—			未掘
51		S3-E15	不整楕円形	150×120×14	C			
52		S3-E15	円形	42×40×20	C			
53		S3-E12	不整円形	40×38×17	C			
54		S3-E12	円形	74×64×16	A			礎
55		NS0-E9	不整円形	128×128×17	A			礎多量
56		NS0-E9	円形	70×68×22	A			礎
57		S6-E21	不整楕円形	76×66×15	A			礎
58		S6-E21	隅丸長方形	138×116×9	C			
59		S15-E18	円形	46×46×21	B			土器
60		S15-E18	不整円形	88×86×20	F			礎
61		S15-E18	隅丸長方形	48×42×7	E			土器
62		S18-E18	不整円形	56×52×28	B			土器
63		S15-E15	不整楕円形	52×42×11	B			
64		S15-E15	不整長方形	52×42×11	C			
65		S15-E15	楕円形	58×48×33	B	縄文中期		土器
66		S15-E15	円形	52×48×17	C	縄文中期		土器
67		S15-E15	円形	24×22×11	C			
68		S12-E12	楕円形	56×40×16	F			
69		S15-E12	隅丸方形	44×42×10	C			
70		S15-E12	楕円形	24×18×17	A			
71		S12-E12	不整楕円形	60×52×26	B			
72		S15-E12	楕円形	60×50×21	C	縄文中期		礎、土器
73		S12-E12	不整円形	82×76×31	C			礎
74		S15-E3	楕円形	64×52×31	B		>115坑	石器
75		S12-E9	楕円形	48×44×17	C			
76		S12-E9	円形	56×56×25	C			
77		S12-E9	不整楕円形	70×54×31	E	縄文中期		土器

番号	図	位置	平面形	規模 (cm)		断面形	時期	切合関係 > 埋る、< 埋られる	備考
				長径×短径×深さ					
78		S15-E9	円形	52×52×18	C				
79		S15-E9	隅丸長方形	48×36×8	F	縄文中期		土器	
80		S21-E12	楕円形	68×62×21	B	縄文中期		土器	
81		S9-E6	隅丸方形	76×64×22	C	縄文中期		礫、土器	
82		S12-E6	円形	52×48×24	C				
83		S12-E6	楕円形	56×50×10	C				
84		S12-E6	楕円形	48×42×20	C				
85		S15-E9	不整楕円形	82×74×18	C	縄文中期	> 86坑	礫、土器	
86		S16-E9	円形?	44×42×13	C		85坑<		
87		S3-E3	不整楕円形	106×98×35	C	縄文中期		土器	
88		S6-WE0	不整長方形	98×78×14	C			礫	
89		S6-E3	円形	52×50×18	A			礫	
90		S6-E3	楕円形	80×48×26	C		> 91坑		
91		S6-E3	楕円形	90×(56)×18	C	縄文中期	90坑<	土器	
92		S9-E3	楕円形	80×74×23	A			礫、土器	
93		S9-E3	不整楕円形	38×38×18	A			礫、土器	
94		S9-E3	不整楕円形	88×78×49	E			礫多量、骨、土器	
95	26	S9-E3	楕円形	128×81×47	B			礫・土器多量	
96	26	S12-E6	不整長方形	130×108×51	E			礫多量、骨、炭、土器	
97		S12-E6	円形	36×34×18	A			土器	
98		S12-E6	不整円形	38×34×15	A				
99		S15-E6	円形	46×46×19	C				
100		S15-E6	不整楕円形	48×44×10	C				
101		S6-W9	円形	104×104×42	A	縄文中期	> 8住	土器、炭	
102		S6-WE0	楕円形	82×68×24	C			礫	
103		S9-WE0	不整円形	72×62×37	F			礫	
104		S12-WE0	隅丸長方形	42×34×10	B			礫、土器	
105		S12-E3	円形	28×24×7	C				
106		S12-E3	楕円形	40×26×43	F			骨	
107		S12-E3	不整楕円形	116×83×21	F			土器	
108	26	S12-E3	円形	64×62×57	F	縄文中期	276坑<	礫多量	
109		S12-E3	楕円形	84×58×28	A	縄文中期			
110		S12-WE0	楕円形	38×32×15	A				
111		S12-E2	円形	46×42×15	E	縄文中期			
112		S12-E3	不整楕円形	56×46×24	C			礫、土器	
113		S15-E3	不整円形	50×46×16	C			土器	
114	26	S15-E3	不整円形	124×116×36	B	縄文後期		礫・土器・骨多量、炭	
115		S15-E3	不整楕円形	80×40×20	E		74坑<	礫、土器	
116		S15-E6	円形	48×46×19	F				
117	26	S18-E3	不整円形	110×100×13	E			礫、土器	

番号	図	位置	平面形	規模 (cm) 長径×短径×高さ	断面形	時期	切合関係	備考
							>切ら、<切られる	
118		S18-E6	楕円形	62×44×11	A			
119		S18-E6	楕円形	76×66×21	C	縄文中期		礎、土器
120		S18-E6	不整楕円形	88×66×23	C			礎、土器
121		S18-E6	不整円形	56×50×12	C			礎、土器
122		S18-E6	楕円形	70×66×26	C			礎、土器
123		S21-WE0	楕円形	90×76×14	F			礎
124		S15-E12	不整円形	42×38×8	C			
125		S15-E12	不整楕円形	94×81×7	C			
126		S15-E12	円形	56×56×30	C			礎
127		S18-E12	不整楕円形	60×54×39	E			礎、土器
128		S18-E15	円形	62×62×23	B			土器
129		S18-E15	楕円形	70×60×20	F			礎
130		S18-E19	楕円形	70×64×26	C			礎、土器
131		S21-E12	円形	50×46×36	A			礎
132		S21-E15	楕円形	58×50×28	A			礎多量
133		S21-E18	円形	98×92×24	B	縄文中期		礎、土器
134		S18-E12	不整楕円形	160×92×37	E			礎多量、土器、骨
135	26	S21-E9	不整楕円形	118×94×46	C	縄文後期		礎多量、土器
136		S21-E9	不整楕円形	120×92×40	C	縄文後期		礎
137		S21-E12	楕円形	100×62×40	F			礎多量
138	27	S21-E18	楕円形	150×120×35	F			礎多量
139		S18-E24	楕円形	74×56×19	A			礎
140		S21-E24	円形	60×58×8	B			
141		S21-E6	楕円形	50×38×19	C		142坑<	礎
142		S21-E6	不整楕円形	102×76×43	F	縄文後期	>141坑	礎、炭、土器
143		S24-E6	不整楕円形	126×92×31	C		144坑<	礎多量
144		S24-E6	楕円形	86×74×24	A		>143坑	礎多量
145	27	S24-E9	楕円形	98×84×32	C			礎多量、土器
146		S24-E9	円形	64×64×4	A			礎
147		S24-E9	円形	76×74×57	F			礎多量、土器
148		S21-E9	不整円形	78×74×28	B			礎
149		S21-E9	楕円形	66×52×14	C			礎
150		S21-E9	楕円形	54×48×10	C	縄文中期		礎、土器
151		S21-E12	不整楕円形	102×86×17	C	縄文後期		礎、土器
152		S24-E12	円形	34×30×19	C			
153		S21-E12	不整楕円形	34×28×17	A			土器
154		S21-E12	不整楕円形	44×34×15	C			
155		S21-E18	隅丸方形	76×74×34	B			
156		S21-E18	円形	72×68×38	E			礎
157		S24-E18	円形	54×54×46	F			礎、炭

番号	図	位置	平面形	規模 (cm)		断面形	時期	切合関係 > 埋る、< 埋られる	備考
				長径×短径×深さ					
158		S24-E15	円形	62×58×32	F			礎、土器	
159		S24-E15	楕円形	58×50×23	C			礎、土器	
160		S27-E12	円形	70×60×38	C			礎	
161		S27-E12	不整楕円形	88×62×21	C				
162		S30-E15	不整形	48×48×20	B				
163		S24-E15	楕円形	48×34×14	B			礎	
164		S24-E15	不整楕円形	82×60×11	A				
165	27	S27-E18	不整円形	151×140×46	C	縄文中期		礎多量、土器	
166		S27-E21	円形	81×78×15	C		>274坑		
167		S27-E12	—	—	—			木掘	
168		S27-E15	不整楕円形	58×44×17	A				
169		S27-E15	楕円形	60×46×33	F			土器	
170		S30-E18	隅丸方形	150×88×30	C	縄文中期	>272坑	礎多量、土器	
171	27	S30-E24	不整楕円形	153×106×48	B	縄文中期		石棒・石器、土器、骨	
172	27	S30-E21	不整楕円形	54×36×41	C			土器	
173		S30-E21	楕円形	100×61×18	A			礎	
174		S30-E21	楕円形	76×58×15	C	縄文後期		礎、土器	
175		S30-E18	楕円形	62×30×19	C			礎多量、土器	
176		S36-E24	不整円形	58×51×25	F			礎	
177		S27-E6	円形	98×96×16	C	縄文後期			
178		S24-E6	—	—	—			未掘	
179		S27-E3	不整形	130×76×21	C				
180		S24-E3	不整楕円形	84×82×26	A			礎	
181		S24-WE0	楕円形	60×48×30	E	縄文中期			
182		S24-WE0	隅丸方形	44×44×14	A				
183		S24-WE0	—	—	—			未掘	
184		S24-WE0	楕円形	—	—			土器、骨	
185		S15-WE0	楕円形	74×64×15	C	縄文中期		礎、土器	
186		S33-E21	楕円形	154×130×36	E	縄文中期	>2住	礎、土器、骨	
187		S12-WE0	円形	40×38×17	B	縄文中期			
188		S12-WE0	円形	30×28×14	C				
189		S12-WE0	円形	42×42×28	C			礎、土器	
190		S6-WE0	円形	36×34×27	A			土器	
191		S9-W3	不整楕円形	77×60×11	A			礎、土器	
192		S6-WE0	不整形	98×56×27	C			礎・土器多量	
193		S3-WE0	楕円形	90×78×17	B			礎多量	
194		S3-W3	楕円形	68×56×23	F	縄文中期		礎、土器	
195		S6-W3	楕円形?	54×(50)×20	C		268坑<	礎、土器	
196		S3-W3	方形	56×56×15	A				
197		S3-W3	不整楕円形	88×68×29	E	縄文中期		礎・土器多量	

番号	図	位置	平面形	規模 (cm)		断面形	時期	切合関係 >切る、<切られる	備考
				長径×短径×高さ					
198		S 3-W 3	不整円形	70×68×40	C	縄文中期	>270坑	土器、骨	
199		S 6-W 3	円形	42×39×9	C			土器	
200		S 6-W 6	不整楕円形	56×48×16	C	縄文中期		土器	
201		S 6-W 6	円形	54×50×53	A			礎、土器	
202		S 12-W 3	不整円形	54×54×17	B			礎	
203		S 21-E 12	不整楕円形	78×58×46	C			礎	
204		S 6-W 12	不整形	198×126×32	C			礎、土器	
205		S 9-W 15	円形	46×44×16	C			土器	
206		S 12-W 12	不整方形	40×38×20	A			土器	
207		S 12-W 19	楕円形	50×40×21	B				
208		S 12-W 12	隅丸長方形	64×54×33	A			土器	
209		S 12-W 12	円形	48×44×13	C			礎多量、土器	
210		S 12-W 12	隅丸長方形	64×54×13	B			礎、土器	
211		S 12-W 12	円形	56×46×11	A			土器	
212		S 12-W 15	楕円形	46×40×27	C			礎	
213		S 12-W 15	不整円形	48×46×23	C			礎、土器	
214		S 18-W 12	楕円形	70×62×27	C			礎、土器	
215		S 18-W 15	楕円形	100×82×16	A			礎	
216		S 21-W 15	楕円形	96×94×30	C	縄文前期		礎、土器	
217	27	S 18-W 12	不整形	234×102×38	F			礎	
218		S 18-W 12	楕円形	—	—	縄文中期		土器、骨	
219	27	S 18-W 15	不整長方形	110×102×21	A			礎、土器	
220		S 27-W 9	楕円形	85×66×13	C				
221		S 27-W 9	円形	66×60×20	C				
222		S 27-W 9	楕円形	36×30×12	F				
223		S 27-W 6	楕円形	40×24×10	C			礎	
224		S 24-W 6	円形	26×24×12	C	縄文中期		礎・土器多量	
225		S 24-W 9	楕円形	46×32×21	F			土器	
226		S 24-W 21	楕円形	100×66×12	A			土器	
227		S 21-W 18	円形	36×34×32	C				
228		S 24-W 18	不整楕円形	78×36×10	F				
229		S 21-W 18	円形	46×46×5	C				
230		S 24-W 15	円形	34×30×12	C				
231		S 24-W 24	円形	28×28×22	B				
232		S 24-W 24	不整楕円形	296×130×31	F			礎、土器	
233		S 18-W 3	不整楕円形	336×186×26	C	縄文中期		礎、土器	
234		S 15-W 27	不整楕円形	202×166×32	A	縄文中期		礎・土器多量、骨	
235		S 12-E 30	不整楕円形	72×50×32	A			礎	
236		S 9-W 30	—	—	—				
237		S 9-W 27	楕円形	96×88×19	F	縄文中期		礎、土器	

番号	区	位置	平面形	規模 (cm)	断面形	時期	切合関係 > 出る、< 埋れらる	備考
				長径×短径×高さ				
238		S 6—W27	不整楕円形	130×98×22	F			
239		S 9—W24	楕円形	100×43×16	A			礎
240		S 9—W24	不整楕円形	66×44×18	C			礎
241		S 6—W24	不整楕円形	118×109×31	A			礎
242		S 6—W24	不整長方形	112×84×18	A			
243		NS 0—E 3	隅丸長方形	140×70×26	A		>20住	
244		S 6—W21	不整楕円形	54×46×10	A			
245		S 6—W21	楕円形	44×42×17	F			
246		S 6—W21	楕円形	52×42×22	F			
247		S 6—W21	不整円形	42×38×14	C			
248		S 6—W21	楕円形	48×38×14	A			
249		S 6—W21	楕円形	38×28×16	C			
250		S 6—W21	円形	48×46×17	C			礎
251		S 6—W21	楕円形	38×28×16	C			
252		S 18—W18	不整円形	44×42×4	C			
253		S 12—E 6	楕円形	50×34×19	E			
254		S 12—E 3	楕円形	34×26×14	A			
255		S 12—WE 0	楕円形	52×44×25	B			礎
256		S 15—WE 0	円形	34×34×16	C			
257		S 21—W12	楕円形	100×54×26	A			
258		S 9—W 9	楕円形	38×28×12	E			礎
259		S 9—W12	円形	50×48×9	C	縄文中期		土器
260		S 12—W12	円形	36×28×10	C			礎
261		S 12—W12	不整楕円形	68×54×26	C			礎
262		S 12—W 9	楕円形	54×32×39	F			礎
263		S 12—W12	不整円形	70×62×22	E			礎、土器
264		S 12—W15	不整楕円形	50×38×17	C			
265		S 6—E 6	楕円形	46×38×21	C	縄文中期		礎、土器
266		S 3—W 3	円形	32×30×31	F	縄文中期		土器、骨
267		S 12—W15	楕円形	52×34×12	F			礎、土器
268		S 6—W 3	円形	54×50×20	C		>195坑	礎
269		S 3—W 3	不整長方形	62×56×16	F			土器
270		S 3—W 3	円形?	50×(48)×7	F		198坑<	
271		S 27—W 9	楕円形	56×48×12	C			土器
272		S 30—E 18	楕円形?	(78)×44×18	C	縄文中期	170坑<	土器
273		S 36—E 30	円形	100×69×22	A			礎、土器
274		S 27—E 21	楕円形?	34×(26)×14	A		166坑<	
275	27	N 3—W12	不整長方形	168×90×24	E	縄文中期	>21住	礎、土器、炭
276	26	S 12—WE 0	楕円形	48×38×15	C		>108坑	礎
277		N 9—E 6	円形	42×39×18	A			礎

第3節 遺物

1. 土器

A 縄文土器（第31～39図、拓影第40～53図） 今回の調査では整理箱（34×54×20cm）で約50箱出土している。全体に遺存状態は良くなく、器形を復元できたものは少ない。また各遺構からの出土遺物については接合作業時に概観しているが、良好な資料はほとんどなく、帰属時期を明確にできるものは少なかった。このため凶化以降の作業にあたって、資料の中から遺存状態の比較的良好なものを抽出し、作業を行なった。図示は遺構に伴うものについては各々にまとめているが、前述の理由により、その遺物が所属遺構の時期を示していないものが多い。各遺構の時期については遺構の項に遺物全体を観察した所見を記したので、そちらを参照されたい。本稿では時期別に概観し、位置付けを行なってみたい。なお実測図、拓影には各々通し番号を付してあるので、稿中では図○、拓○とする。

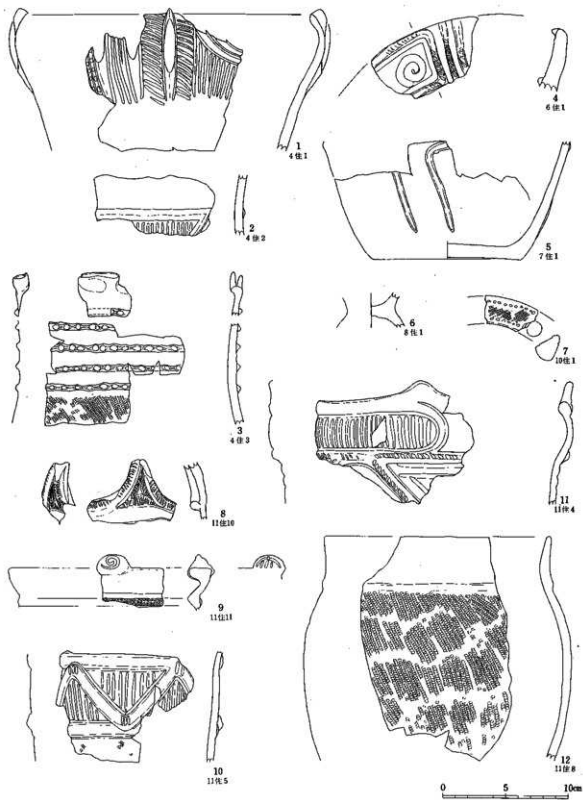
- 1) 早期末葉～前期初頭の土器 本遺跡で確認された最も古い資料である。小片のため図示していないが、第2号住居址の覆土中及び遺構外より数片出土している。いずれも胎土に繊維を含む厚手の尖底土器の破片である。中山地区では各地で出土しており、資料は増加してきている。
- 2) 前期後葉～終末の土器 後葉に位置付けられる拓256、後葉～終末の拓5・6・282など数点出土している。後者は浮線文・竹管文等を多用する土器である。近年松本市では坪ノ内遺跡、南方遺跡などで良好な資料を得ている。
- 3) 中期初頭の土器 数片が出土している。中山地区では向畑遺跡などに良好な資料がある。
- 4) 中期中葉の土器 この段階になると資料が急増する。器形の復元できるものは少なく、時的にまとまった良好な資料もない。この地域では勝坂式土器、斜行沈線文系土器、平出第三類A土器、焼町土器などが混在する様相がみられるが、今回の出土資料中にもそれらの破片がみられる。第265号土坑の図65、拓279や拓98・99・274・279は細い工具による押し引きが多用されている勝坂式の古い段階に位置付けられる資料である。図63の浅鉢や図65の深鉢もこの時期のものであろう。第11号住居址から出土した図8～11・27・28・79・80・83などは、さらに時代が下るものである。また拓94はこの頃の有孔鈔付土器の胴部である。拓4・68・187・190・192は焼町土器で、拓53は平出第三類A土器である。他にも数片あるが、遺存状態は良くない。今回出土した資料は少ないが、中山地区内ではこの時期の資料が近年急増しており、今後の分析が待たれる。
- 5) 中期後葉の土器 この遺跡の中心となる時期である。出土した遺物は後葉のほぼ全段階のものがあるが、中心となるのはⅢ・Ⅳ段階（曾利Ⅲ～Ⅴ式期）である。以下段階ごとに概観してみたい。Ⅰ段階の資料には第4号住居址に伴う図1・2のほか、土坑に伴う図23～25・51・64、遺構外の図69・71・82・84、拓78・345・346・350・359～362などがある。拓29はこの段階の台付土器

と思われる。いずれも唐草文系の土器である。II段階の資料には図61、拓48・292-296・303・351・352などがある。前段階同様、唐草文系土器が主体である。第20号住居址の2基の埋壺(図34・38)はII段階の新しい時期に位置付けられるものである。いずれも唐草文系の土器であるが、図38は地文の縄文の上に沈線で文様を描いている。口縁部内側の形態は唐草文系土器特有のものであるが、胴部はおそらく東北地方の大木系土器の影響を受けたものと考えられる。III期になると遺構の数、遺物の量ともに増加する。第20号住居址の覆土から出土した図35・37・49-51、拓112、第11号住居址の図13-19、拓64をはじめ、遺構内外より多量の資料を得ている。この段階になると主体である唐草文系土器のほか、加曾利E系の土器が増加する。またこの段階から次段階の資料の中には、退化した有孔鈔付土器の終末段階の破片がいくつかみられる(図32・43・55)。いずれも器形は壺形土器の影響を受け、肩部が張り、鈔もわずかに盛り上がりを残す程度である。孔は省略され、数も減り貫通していないものもある。図55の内面にはわずかに朱彩が残る。IV期の資料も良好なものが多く、第20号住居址の覆土からは図39-53、拓112-128・129-134とまとまって出土している。拓135-137はさらに時代が下がるとと思われる。図44・45はバケツ状の吊手の破片である。図46は異形の壺形土器である。両側のルーブ状の隆帯の上下に穴があり、紐を通して吊ったものかもしれない。その他この時期に位置付けられるものは図7・13・62・88-90、拓159・223・306-310、322、327などである。この段階の資料は中山地区の出土遺物中には多くみられ、遺跡立地の変遷などを含め、今後の分析が期待される。

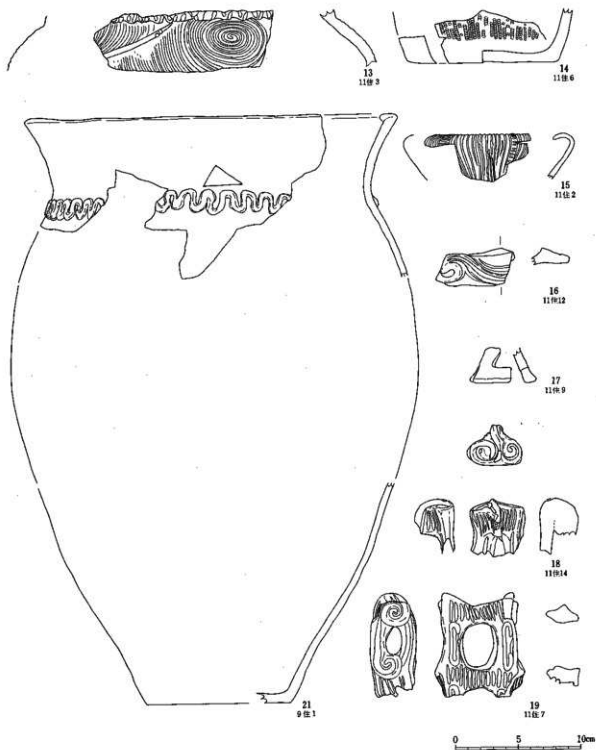
6) 後期初頭～前葉の土器 後期前葉の住居址2軒(第15・16号住居址)が検出されているが、遺物は遺構外のものを含めても少なく、器形を復元できたものはない。住居址に伴うものはいずれも遺存状態が極めて悪く、遺構外及び他遺構の混入品を図示した。図42・47・85-87、拓14・22・55・65・102-104、107-109・202・239・311-321・323-326・387・393-395などがある。ほとんどが後期前葉堀之内I式期に位置付けられる。

B 土器・陶器

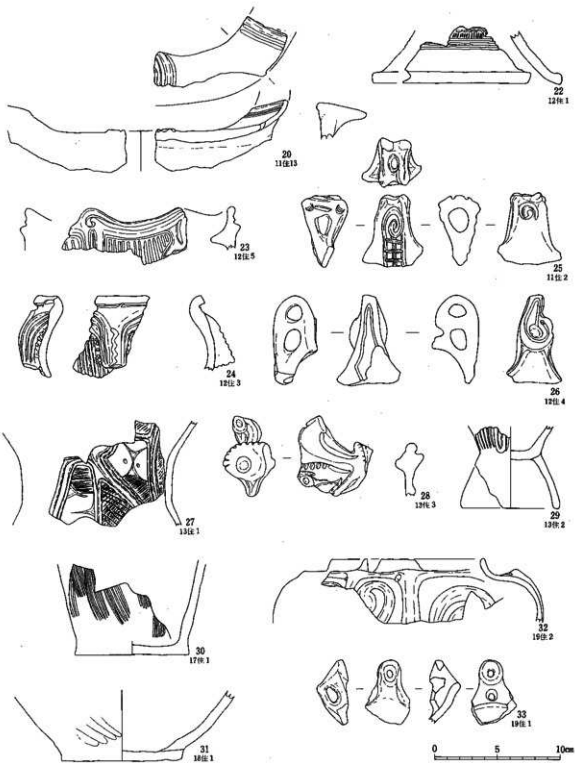
調査1区では、検出面および土坑から古代および近世の遺物が出土している。検出面からは、近世のすり鉢(第38図78)が出土している。全体に鉄軸がうすくかけられており、底部には回転糸切り底が残っている。産地は不明である。この他に、第2号土坑より灰軸陶器・土師器が出土しているが、小片のため図化提示できなかった。



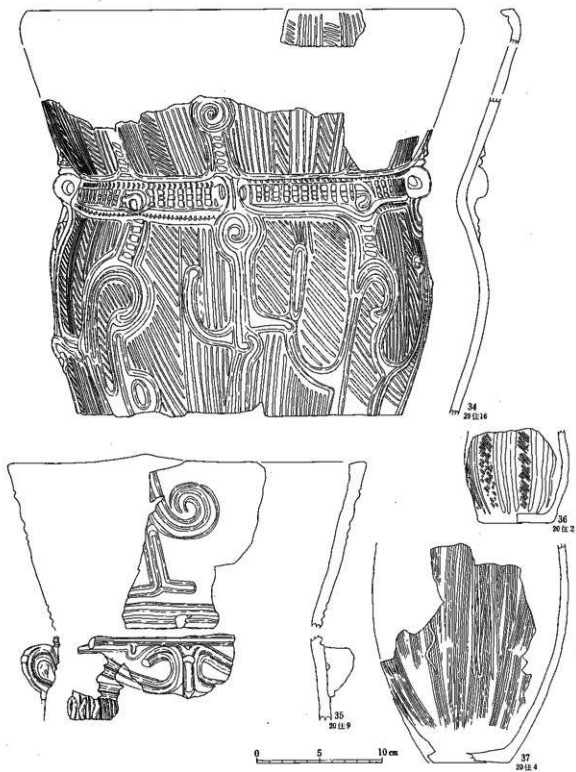
第31图 出土土器(1)



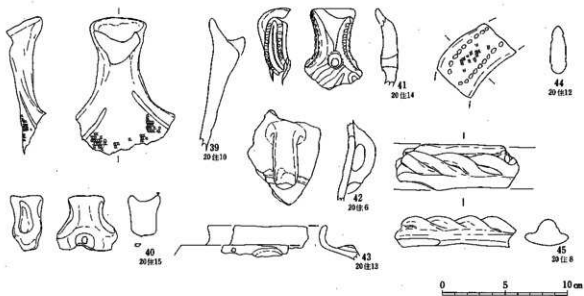
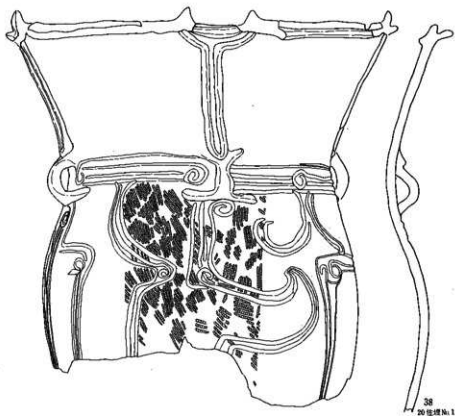
第32图 出土土器(2)



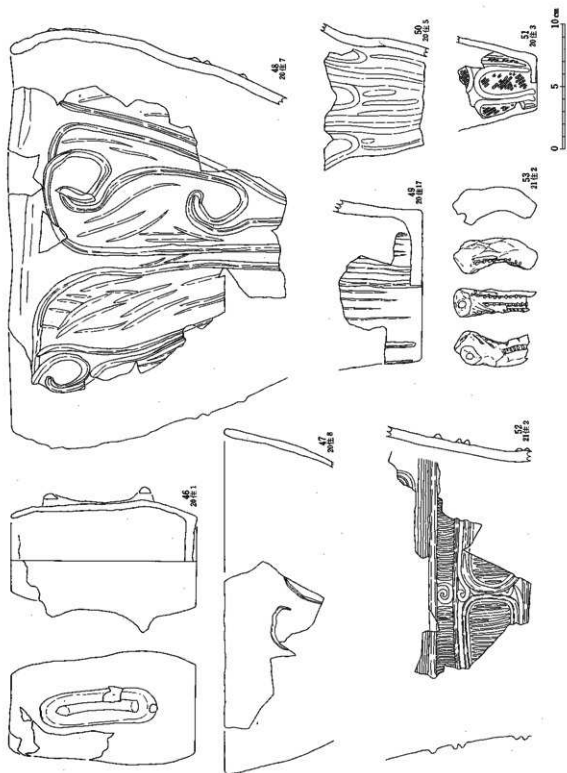
第33图 出土土器(3)



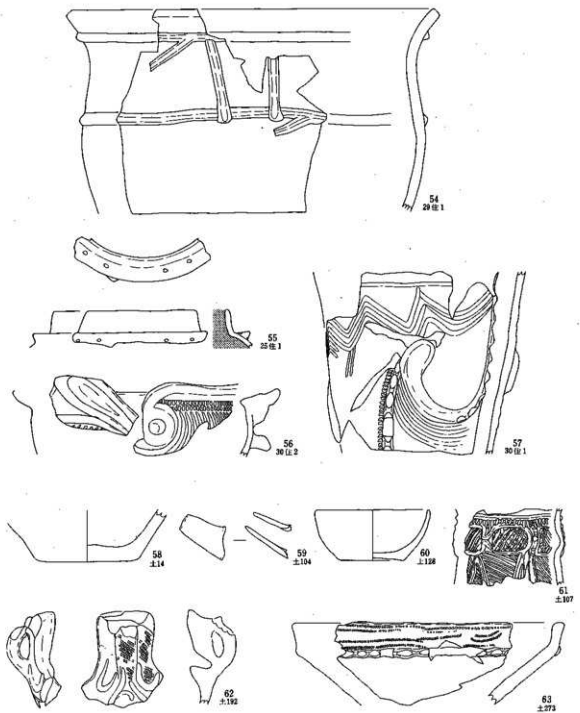
第34图 出土土器(4)



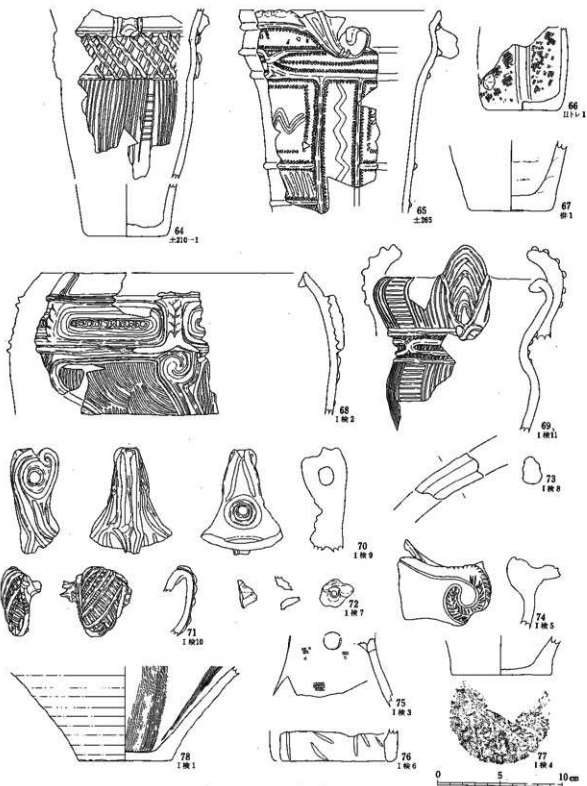
第35图 出土土器(5)



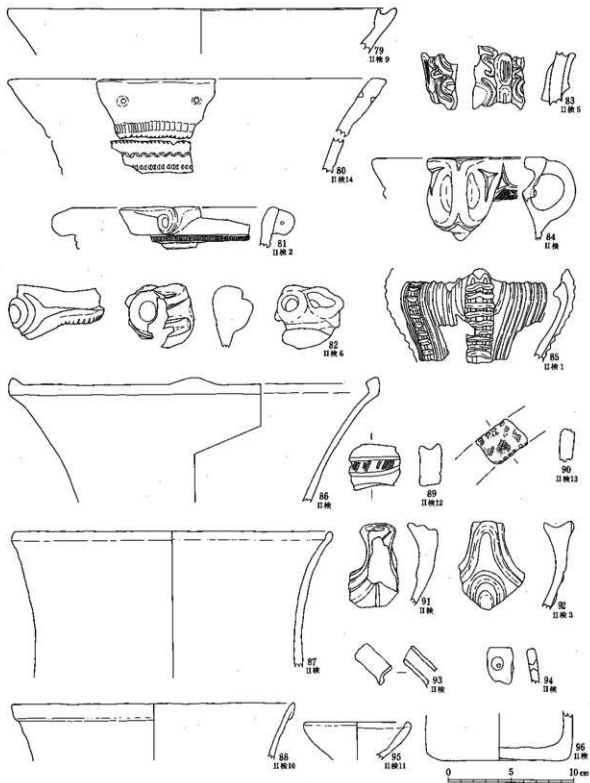
第36图 出土土器(6)



第37图 出土土器(7)



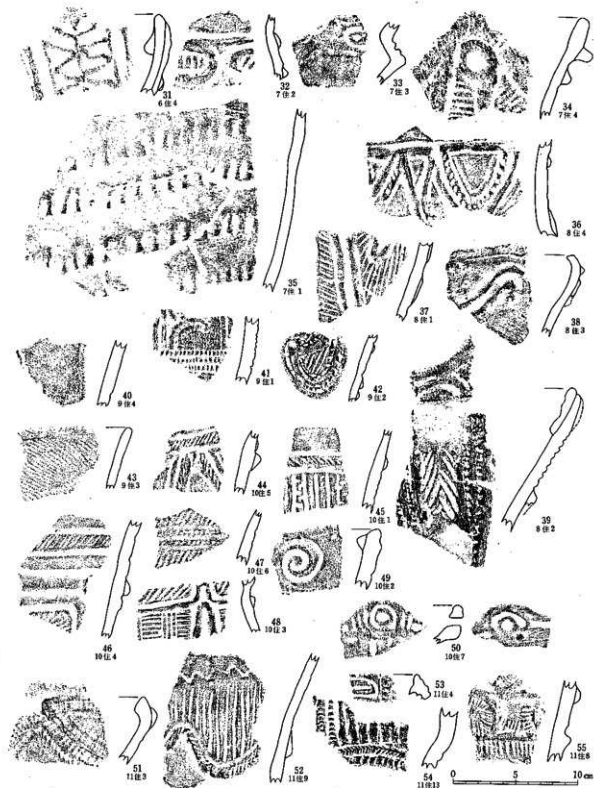
第38圖 出土土器(8)



第39图 出土土器(9)



第40图 出土土器拓影(1)

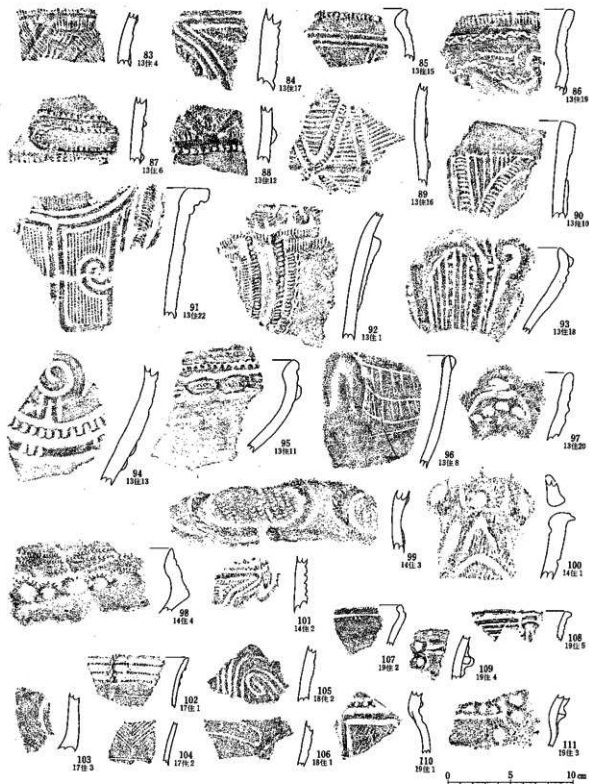


第41图 出土土器拓影(2)

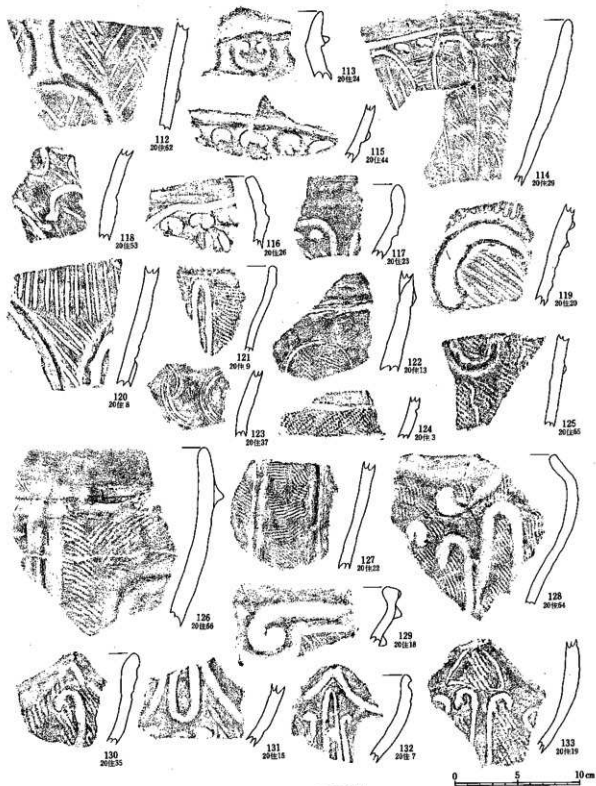


第42图 出土土器拓影(3)

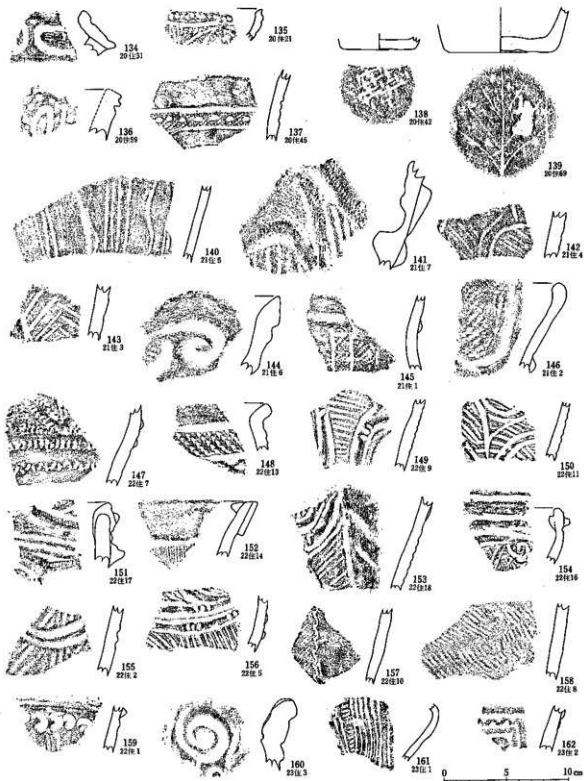
0 5 10cm



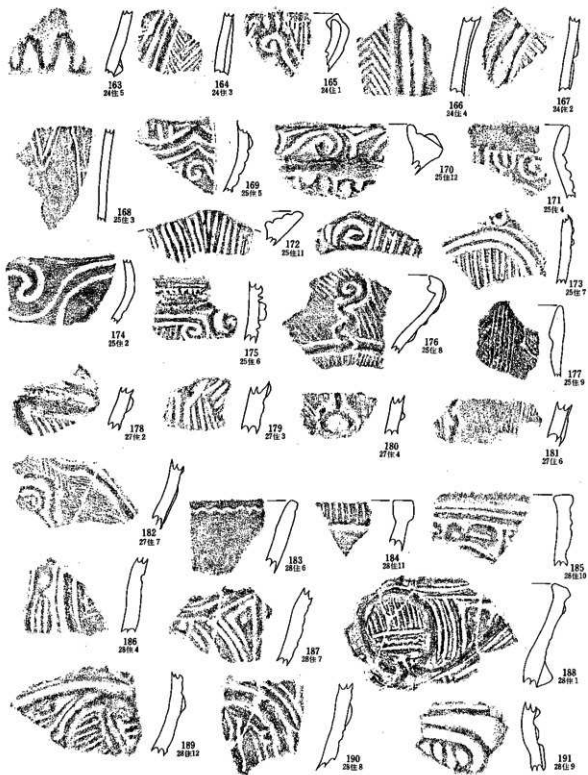
第43图 出土土器拓影(4)



第44圖 出土土器拓影(5)



第45圖 出土土器拓影(6)

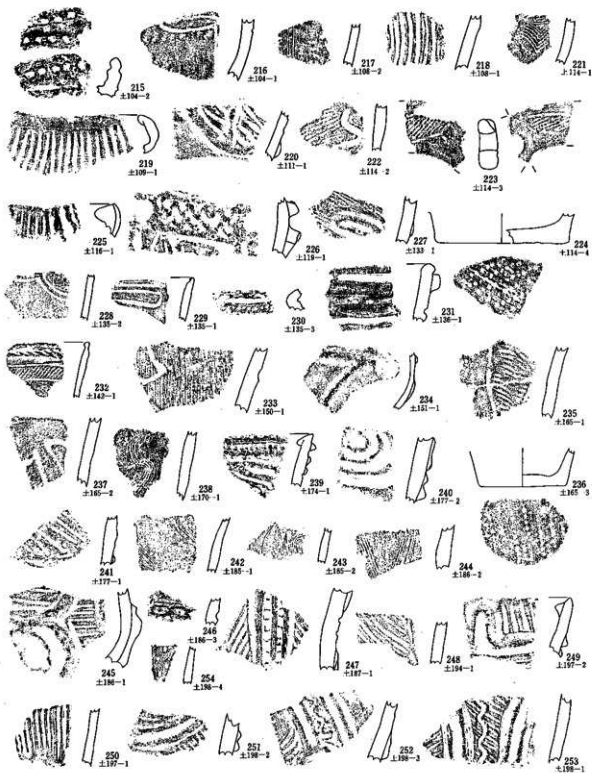


第46图 出土土器拓影(7)

0 5 10cm

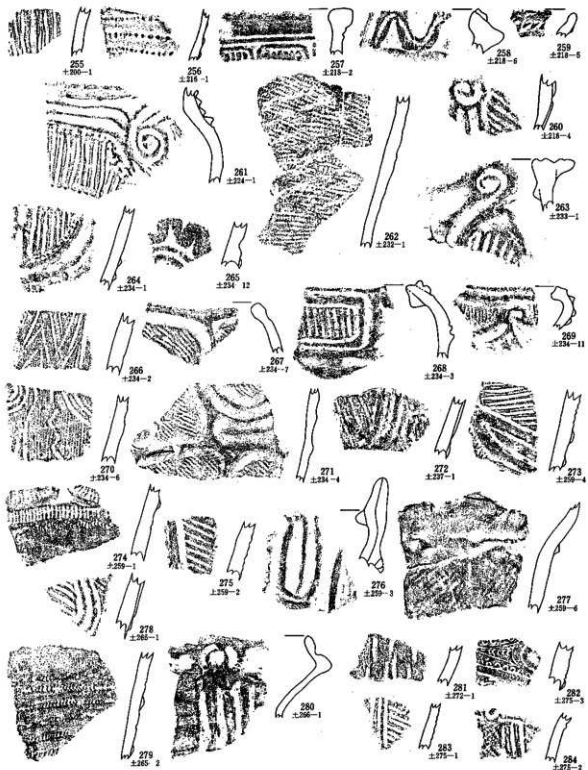


第47圖 出土土器拓影(8)



第48图 出土土器拓影(9)

0 5 10cm



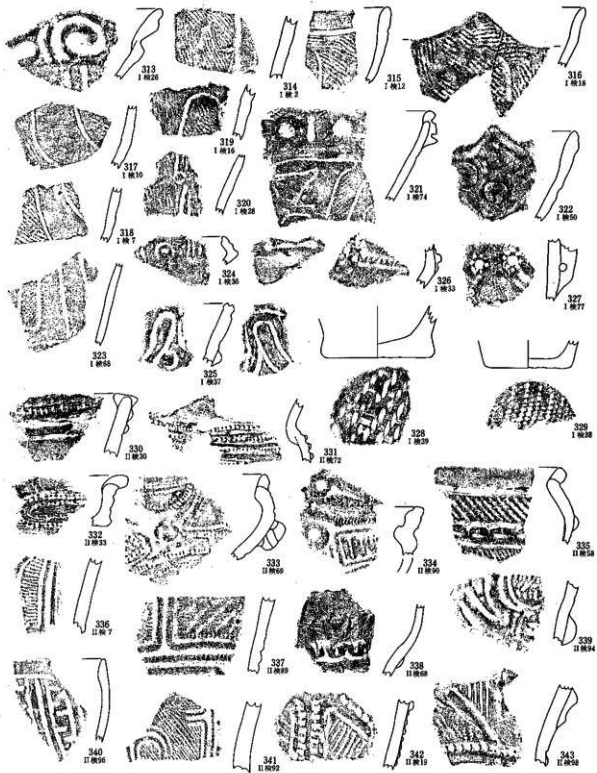
第49图 出土土器拓影(0)

0 5 10cm



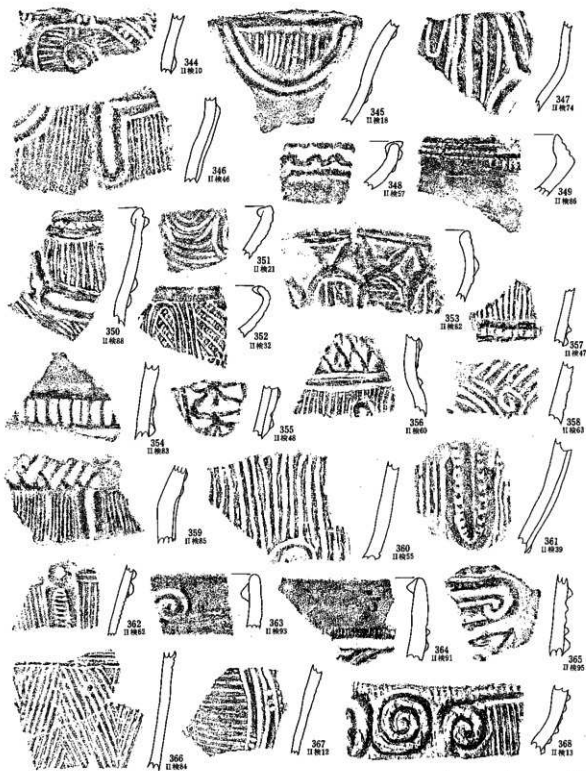
第50图 出土土器拓影(1)





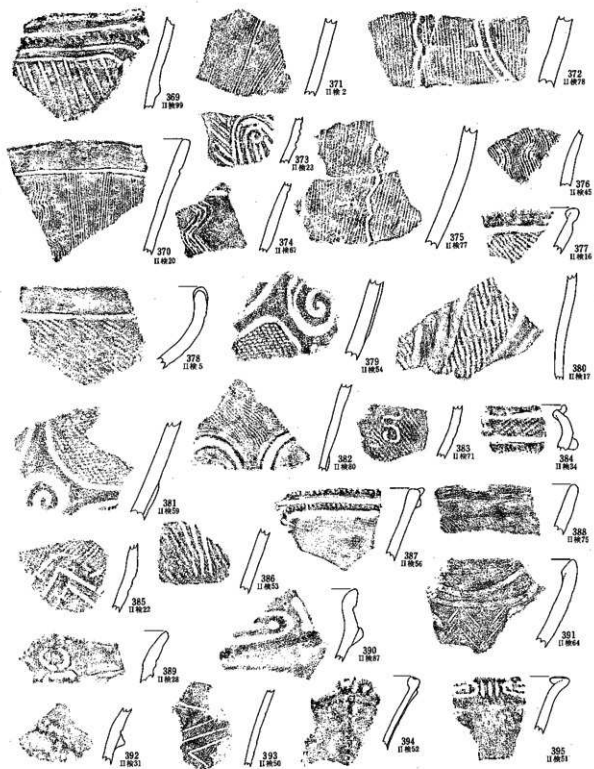
第51圖 出土土器拓影(2)



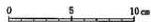


第52图 出土器拓影18

0 5 10 cm



第53图 出土土器拓影(4)



2 土製品 (第54~56図)

土偶・土製円盤・ミニチュア土器が総計15点出土している。

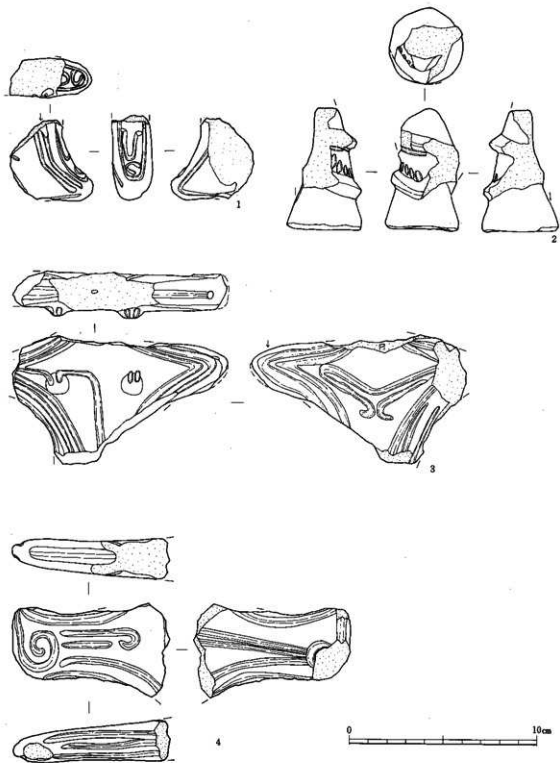
土偶 (1~9) は11点が出土している。このうち8点が竪穴式住居からの出土である。特に、第11・12・20号住居からは別個体の土偶が2点ずつ見つかっている。全形をうかがえる土偶はなく、残存部位別にみると(片)腕部1・腕+胴部1・胴部1・(片)脚部6・不明2点がある。また、5点の土偶の破損面に、分割した粘土塊を接合するための芯棒の痕跡がみられる。

土製円盤 (10) は第29号住居から1点出土している。表面の剥落で文様は不明である。周囲を打ち欠いて成形した後、側面を研磨している。

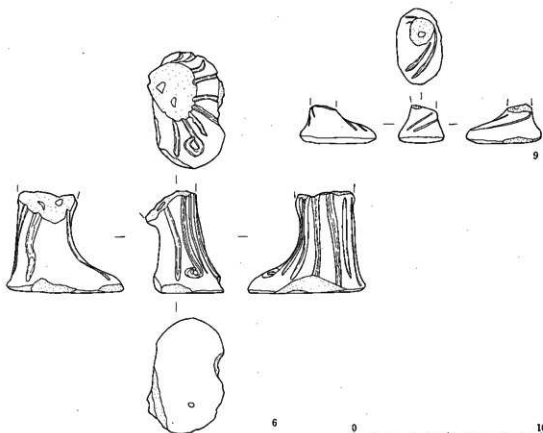
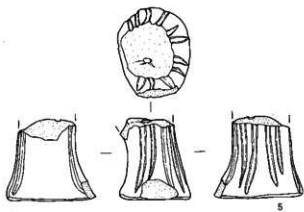
ミニチュア土器 (11~13) は住居から3点が出土している。11は深鉢形を呈し、断面に底・胴部の粘土接合痕がみられる。12は鉢形の完形品である。手づくねによって製作されているため底部は厚く、口縁部付近の外面には指頭圧痕が顕著に残っている。13は推定直径6.8cmの蓋で、周縁部に孔が2つあけられている。

第2表 土製品一覧表

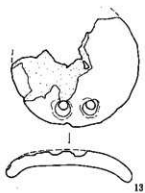
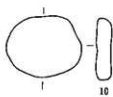
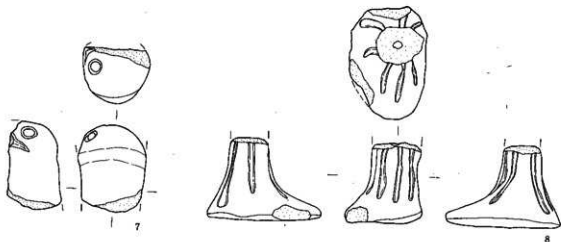
No	図No	種類	出土地点	長さ 口径 (cm)	幅 底径 (cm)	高さ 器高 (cm)	重さ (g)	破損状況	備考
1	1	土偶	1住	(4.4)	(3.7)	(2.1)	(26)	胴	
2	2	"	11住No 5	(6.4)	(3.9)	(4.0)	(66)	脚	
3	3	"	11住	(6.8)	(11.4)	(2.3)	(111)	胴・腕	芯棒痕1
4	4	"	12住NW	(4.9)	(8.2)	(2.1)	(77)	左腕	
5	"	"	12住床	(3.4)	(4.0)	(4.4)	(26)	脚	
6	5	"	20住No13	(4.3)	(3.8)	(4.8)	(60)	"	芯棒痕1
7	6	"	20住	(6.2)	(3.7)	(5.5)	(79)	"	" 3
8	7	"	25住No 3	(4.6)	(3.7)	(2.9)	(47)	?	
9	8	"	棟 (II)	(4.3)	(4.0)	(6.0)	(57)	脚	芯棒痕1
10	9	"	" "	(2.0)	(2.5)	(4.0)	(14)	"	"
11	"	"	" "	(3.3)	(3.4)	(2.8)	(18)	?	
12	10	土製円盤	29住	3.3	3.9	1.0	12	完形	
13	11	ミニチュア 土器	13住	—	4.6	—	(43)	底部	深鉢
14	12	"	17住	3.5	—	3.2	(41)	ほぼ完形	鉢、手づくね
15	13	蓋	24住	6.8	—	—	(27)	2/3残	



第54図 土製品(1)



第55圖 土製品(2)



第56圖 土製品(3)

3 石器 (第57～63図)

今回の発掘調査で出土した石器群のうち定形的な石器、原石・石核の点数 (全体に占める割合) は以下のとおりである。

- | | |
|-----------------------|---------------------|
| ①有舌尖頭器 1点 (0.6%) | ⑨石錘 2点 (1.2%) |
| ②石鏃 13点 (8.1%) | ⑩凹・敲・磨石 50点 (31.1%) |
| ③石錐 1点 (0.6%) | ⑪石皿 1点 (0.6%) |
| ④ビエス・エスキーユ 12点 (7.5%) | ⑬砥石 4点 (2.5%) |
| ⑤石匙 2点 (1.2%) | ⑭研磨礫 1点 (0.6%) |
| ⑥スクレイパー 9点 (5.6%) | ⑯原石・石核 10点 (6.2%) |
| ⑦打製石斧 50点 (31.1%) | 総計 161点 (100.0%) |
| ⑧磨製石斧 5点 (3.1%) | |

このほかに 2 次加工のある剥片、使用痕のある剥片、剥片、碎片等が少量出土しているが、報告書では割愛している。整理作業の方針、石器群の分類方法、一覧表の略号については坪ノ内遺跡の報告書⁽¹⁾に従っている。また、石質鑑定については森義直氏のご教示を受けている。なお、文中の石器を説明する数字は図番号を意味している。

弥生前遺跡の石器群の大半は縄文時代の遺跡から通常出土する石器である⁽²⁾。そこで、各石器の概要は実測図と一覧表にかえ、この項では本遺跡の石器群がもつ特徴・問題点を述べることにする。

1. 有舌尖頭器の出土 旧石器時代最終末から縄文時代草創期にかけてみられる有舌尖頭器が 1 点出土している。1 は先端をわずかに欠くだけで、残存長 9.27cm を計る大形の尖頭器である。背面の右側辺の先端付近以外は全面にわたって剝離調整が施されている。本資料は長身である点、舌(茎)部が逆刺をもたずに逆三角形を呈している点などから、有舌尖頭器の中でも比較的古い様相を有している。本遺跡周辺では西仁能田(弘法山古墳のある丘陵)から木葉形尖頭器、千石付近から有舌尖頭器が採集されているので⁽³⁾、中山地区周辺に該期の遺跡が存在する可能性は非常に高いと考えられる。

2. 石器の組成 本遺跡では 13 種類の定形的な石器が 151 点出土している。このうち打製石斧と凹・敲・磨石は各 50 点出土しており、全体の約 1/3 の割合を占めている。また、石鏃、石錐、石匙などの小形石器は少量しか出土していない。小形石器は移動しやすく、また検出しにくいので、遺構の残存度や発掘の精度によって増減があると考えられるが、こうしたあり方は本遺跡の中心時期である縄文時代中期後葉に典型的な石器組成と考えられる。なお、磨石とセットの使用が考えられる石皿はわずかに 1 点が出土しただけである。

3. 石器出土遺構 石器を出土した遺構は竪穴式住居が 19 軒、土坑が 8 基で、他は検出面・排土採集されている。特に、第 20 号住居の 20 点 (ビエス・エスキーユ 2・スクレイパー 1・打製石斧 7・磨製石斧 1・凹・敲・磨石 4・石皿 1・原石 4 点)、第 12 号住居の 12 点 (石鏃 2・打製石斧 7・

磨製石斧1・凹・敲・磨石2点)が、比較的まとまって出土した例である。これらについては住居が廃絶されるときに残される石器の量やその後廃棄されたりした石器の量がある程度反映しているものと考えている。

4. 石錘について 切り目石錘(54)、打ち欠き石錘(55)が各1点出土している。これらは楕円～円形の自然礫を加工して紐掛け用の袂りを作り出しているものである。本遺跡周辺の坪ノ内遺跡の発掘調査では石錘が10点出土しているが、現在までのところ松本市内で石錘が出土している遺跡は数えるほどしかない。石錘は一般に魚網錘として理解されている。しかし、本遺跡や坪ノ内遺跡のように大きな河川から離れた丘陵部に少量出土する石錘のあり方は、錘を使用する漁法や漁地の問題(縄文時代の生活領域)など多くの問題を含んでいる。今後、遺跡の立地や古環境の復元、出土資料の増加をまって検討しなければならない課題である。

註1 【松本市坪ノ内遺跡】1990-3 松本市教育委員会

2 図番号70は直方体を呈し、全面に砥面をもつと考えられる砥石である。これについては形態・石質・わずかに凹の砥面をもつことなどから、古墳時代以降の金属製品用砥石と考えられる。

3 【松本市神田遺跡】1989-3 松本市教育委員会 P.10

【東京都・松本市・塩尻市誌】第2巻 歴史上 東京都・松本市・塩尻市郷土資料編纂会 1973 P.28-29

第3表 石器一覧表

①有舌尖頭器

No	図No	出土地点	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石質	破損状況	備考
1	1	検	(9.27)	2.29	1.00	(20.25)	黒曜石	先端欠	

②石錘

No	図No	分類			出土地点	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石質	破損状況	備考
		基部	茎部	側縁								
1	2	平	無	III	5住	1.64	1.18	0.25	0.45	チャート	O	
2	3	凹	#	IV	11住	2.53	2.46	0.84	4.40	黒曜石	#	未成品?
3	4	#	#	#	12住	1.88	(1.18)	0.17	(0.35)	#	B	
4	5	#	#	V	# 床	2.65	1.52	0.48	1.40	#	O	
5	6	#	#	II	13住	1.96	1.52	0.30	0.65	チャート	#	
6	7	#	#	III	17住	(1.32)	(0.96)	0.18	(0.20)	#	D	
7	8	#	#	II	23住	2.33	1.40	0.30	0.70	黒曜石	O	
8	9	#	#	IV	24住P1	1.82	1.54	0.24	0.45	#	#	
9	10	#	#	?	検(1)	(2.31)	(1.90)	0.53	(2.25)	#	C	未成品?
10	11	#	#	IV	検(II)	(1.69)	(1.17)	0.15	(0.25)	#	B	
11	12	#	#	#	#	1.90	(1.51)	0.38	(1.05)	チャート	#	
12	13	#	#	V	N 6-W39	(2.04)	(1.12)	(0.25)	(0.70)	黒曜石	H	
13	14	#	#	III	#	2.19	1.50	0.32	0.65	#	O	

③石錘

No	図No	分類		出土地点	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石質	破損状況	備考
		形態	調整								
1	15	つ	片	検(1)	2.51	1.65	0.59	0.19	黒曜石	完形	

④ピエス・エスキュー

No	図 No	分類		出土地点	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	石質	破損 状況	備 考
		利部	線部								
1		I		1住	1.36	1.19	0.43	0.75	黒燐石		
2		"	▽	20住	2.84	1.43	0.84	2.60	"		
3	16	"	"	"	2.27	1.21	0.62	2.25	"		
4	17	"		25住床	1.81	1.95	0.63	2.40	"		
5		"	▽	土135	1.30	1.37	0.71	1.30	"		
6		"		検(I)	1.16	1.15	0.30	0.50	"		
7	18	"		"(II)	2.33	2.18	0.66	2.90	"		
8	19	"		" "	1.97	1.14	0.36	1.15	"		
9		"		" "	1.76	1.10	0.52	1.00	"		
10		"		" "	2.26	1.40	0.39	1.50	"		
11	20	II	●	" "	2.21	1.90	0.86	4.00	"		
12	21	III		トレンチ(II)	2.64	1.71	0.73	2.10	"		

⑤石匙

No	図 No	分類			出土地点	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	石質	破損 状況	備 考
		位置	刃部	調整								
1	22	斜	直	面	2住P2	9.04	6.08	0.87	41.65	粘板岩	完形	刃部摩耗
2	23	横	外	片	土171	3.42	6.44	1.90	18.25	"	"	

⑥スクレイパー

No	図 No	分類			出土地点	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	石質	破損 状況	備 考
		刃部	調整	素材								
1	24	外	両	縦	11住	3.15	4.12	0.97	11.10	チャート	完形	
2	25	内	片	?	" 床	8.90	(13.20)	2.33	(206.40)	砂質凝灰岩	片割欠	
3		点	両	横	20住No4	(7.70)	(5.74)	1.00	(30.15)	チャート	片割欠	
4		外	片	縦	27住	3.27	2.83	0.76	8.40	"	完形	
5	26	内	両	横	検(I)	(6.05)	5.46	1.46	(27.50)	"	片割欠	
6	27	直	片	"	" "	2.60	3.13	0.67	6.20	"	完形	
7	28	外	"	"	" "	2.36	2.33	0.69	4.10	"	"	
8	29	内	"	縦	"(II)	6.61	4.91	1.18	37.75	"	"	
9	30	外	"	"	" "	(5.40)	6.81	(1.25)	(32.35)	凝灰凝灰岩	片割欠	

⑦打製石斧

No	図 No	分類		出土地点	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	石質	使用痕			破損 状況	備 考
		平面	刃部							頭部	胴部	刃部		
1	31	撥	直	12住	(7.91)	6.76	2.11	(126.10)	砂岩				B 2	
2		"	円	"	8.37	8.59	1.64	124.50	"				O	未成否?
3	32	撥	直	"	(8.13)	3.81	0.76	(33.50)	粘板岩				B 3	
4	33	撥	?	"	(14.60)	(5.58)	2.53	(189.50)	"		○		A 1	
5	34	分	偏	"	7.98	5.48	1.53	63.00	砂岩			●	O	
6	35	撥	円	"	9.76	4.67	1.69	86.30	砂質粘板岩		○		"	
7		分	"	"	(10.93)	5.48	2.01	(131.10)	砂質頁岩		○	●	B 3	
8	36	"	"	13住床	11.98	5.21	1.34	150.50	"	●	○	●	O	
9		?	?	14住P1	(7.19)	(5.66)	(0.75)	(41.00)	粘板岩				残	
10	37	分	偏	20住No17	10.82	6.47	2.41	193.00	"		○		O	
11	38	撥	円	"	(8.51)	7.30	2.61	(216.50)	砂岩			●	B 2	
12	39	"	"	"	(11.20)	5.54	1.26	(89.80)	"				B 3	
13		?	偏	"	(8.45)	(4.56)	1.50	(57.40)	"				B 2	
14	40	分	?	"	(11.48)	(5.24)	(1.39)	(99.50)	"		○		C	
15	41	撥	円	"	(11.48)	5.62	2.24	(202.20)	砂質粘板岩		○	●	B 3	

No	図 No	分類 平面 刀部	出土地点	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	石質	使用痕			破損 状況	備 考
									頭部	胴部	刃部		
16		柳 偏	20住No17	(8.80)	5.62	(1.59)	(77.55)	粘板岩		○		B 1	
17		短 円	24住床	(9.27)	4.02	1.25	(57.40)	砂質頁岩		○	●	B 3	
18		撥 ?	#	(6.47)	(3.39)	(1.78)	(50.10)	粘板岩		○		A 1	
19		" "	#	(6.23)	(3.89)	(1.02)	(34.15)	"				A 2	
20		分 円	27住床	(9.24)	6.11	1.30	(85.40)	"		○		B 3	
21	42	撥 #	#	(11.74)	(5.84)	1.45	(127.60)	砂岩				C	
22		? #	#	(5.57)	(5.30)	(0.90)	(35.40)	粘板岩				B 1	
23		" "	29住	(5.80)	(8.33)	(1.50)	(97.30)	砂質頁岩			●	#	
24		" ?	30住No 5	(10.80)	(6.59)	2.14	(206.50)	粘板岩		○		C	
25	43	撥 偏	# 埋篋	9.83	3.62	0.86	34.65	"		●	●	O	
26	44	分 円	土74	(10.66)	6.81	2.20	(164.75)	"				B 3	
27		撥 偏	グリット	13.61	7.48	2.30	246.10	砂岩		○	●	O	
28		" 円	検 (II)	(11.74)	5.97	1.25	(98.60)	粘板岩				B 3	
29		? ?	#	(4.06)	(3.48)	(0.85)	(15.10)	"				A 1	
30		撥 円	# (II)	(7.26)	(5.30)	1.09	(48.00)	砂質粘板岩				A 3	
31		" ?	# #	(8.37)	(7.39)	(2.76)	(256.00)	粘板岩		○		C	
32		? #	# #	—	—	—	(21.70)	"				残	
33		" "	# #	(4.01)	(4.00)	(1.70)	(39.00)	砂質頁岩		○		C	
34		分 偏	# #	12.34	6.69	2.20	296.50	粘板岩		○	●	O	
35		撥 ?	# #	(7.71)	(5.73)	(2.80)	(145.40)	"		○		A 2	
36		? #	# #	—	—	—	(49.10)	"		○		残	
37	45	撥 円	# #	11.01	4.79	1.82	110.10	砂質頁岩		○		O	
38		" #	# #	11.31	4.76	1.73	97.40	粘板岩		●	●	#	
39		" 偏	# #	7.65	4.11	1.25	58.40	"		○	●	#	
40		短 円	# #	(8.21)	(5.15)	(1.73)	(87.60)	"				● B 2	
41		? ?	# #	(5.85)	(5.47)	(1.50)	(73.25)	"		○		C	
42		" #	# #	—	—	—	(28.25)	"			○	残	
43		短 #	# #	(7.76)	4.48	(1.19)	(62.45)	"		○	●	A 3	
44	46	撥 直	# #	9.91	7.83	2.38	189.10	砂岩		○		O	
45		" 円	# #	(9.99)	4.67	1.48	(70.30)	"		○	●	B 3	
46	47	" #	# #	(10.81)	5.30	1.62	(111.95)	粘板岩		○	●	#	
47		" "	検	(8.30)	(4.87)	1.39	(78.45)	"				#	
48	48	" #	#	(11.45)	7.26	3.01	(325)	"		○	●	#	
49		" #	#	(12.21)	8.80	2.67	(365)	凝灰質泥岩				#	
50		短 ?	粘土 (II)	(13.24)	(3.63)	(2.53)	(157.70)	砂質粘板岩				D	

⑧磨製石斧

No	図 No	分類	出土地点	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	石質	残存 状況	備 考
1	49	定角	12住	12.41	4.14	1.49	104.40	砂岩	O	未成品
2	50	"	20住	(4.28)	3.37	0.79	(20.60)	礫玉質	B 3	
3	51	"	土234	(11.32)	(5.40)	2.89	(307.70)	緑泥片岩質	A 3	刃部再加工
4	52	"	検 (I)	(6.37)	(4.59)	(2.21)	(86.55)	礫玉質	C	
5	53	乳棒?	# (II)	(6.14)	(3.44)	(2.05)	(68.50)	雲質粘板岩	A 2	未成品?

⑨石鏢

No	図 No	分類 扶り位置	出土地点	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	石質	破損 状況	備 考
1	54	II A	25住	(4.64)	(2.50)	(1.28)	(25.40)	粘板岩	1/2欠	
2	55	I B	トレンチ (II)	3.96	3.70	2.50	40.70	凝灰岩	劣影	

⑩凹・蝕・磨石

No	図 No	使 用 痕		素材	出土地点	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	石質	破損 状況	備 考
		凹打	磨面									
1				H	7住	14.60	3.43	2.17	343	砂岩	発見	
2		○ (2)	○	H	1149No.8	(9.35)	(6.48)	(4.45)	(340)	燧石	1/4次	
3	56		○	B	# No.12	9.47	7.54	4.73	400	燧石	発見	
4		○ (2+2)		B	# No.20	10.19	7.54	5.62	530	砂岩	#	
5		○ (2)		B	116	13.19	9.65	4.90	665	燧石	#	
6		○ (2)		A	111E:149No.2	6.31	6.50	6.11	335	燧石	#	
7			○	F	12#	8.35	7.42	3.10	225	#	#	
8			○	O	13#	(9.50)	(5.82)	(4.45)	(390)	砂岩	1/2次	特殊磨石?
9	57	○ (2)		E	13#	8.80	8.35	4.66	470	燧石	発見	
10			○	A	17#	4.64	4.67	3.72	95	燧石?	1/6次	
11	58	○ (1+1)		E	204No.4	7.66	(7.51)	(5.11)	(340)	燧石?	1/6次	
12		○ (2+2)		#	#	9.35	7.85	4.60	360	燧石	発見	
13	59	○ (2+2)		O	# No.11	11.15	8.43	4.71	620	砂岩	#	
14			○	I	20#	(6.07)	(4.30)	(2.66)	(128)	燧石	1/2次	
15		○ (1)		E	235No.2	5.74	9.95	5.32	570	安山岩	発見	
16			○	E	24#	(6.78)	(3.46)	(3.84)	(162)	砂岩	1/3次	
17		○ (1+2)		O	25#	(10.04)	(8.75)	4.01	(470)	燧石	1/4次	
18	60		○	B	27#E.6	7.16	5.56	4.56	238	燧石	発見	
19			○	G	28#	15.38	5.68	3.15	350	燧石	1/2次	
20			○	B	30#E	10.77	4.82	4.03	280	砂岩	1/5次	
21		○ (1+2)		O	332	(6.43)	7.72	(3.76)	(358)	燧石	2/5次	
22		○ (1+1)		C	783	11.64	9.14	3.97	575	砂岩	発見	
23	61	○ (3+3)		B	213#	12.17	7.45	3.84	460	燧石	1/2次	
24			○	C	土184	(9.51)	(2.68)	(2.13)	(167)	燧石	1/3次	
25				O	概 (1)	—	—	—	—	燧石	発見	
26		○ (1)		O	概	8.89	7.69	6.46	515	安山岩	発見	
27		○ (1+1)		I	#	(7.72)	(5.23)	(3.40)	(181)	砂岩	1/2次	
28	62		○	A	#	7.97	7.89	5.84	440	安山岩	発見	
29		○ (2)		H	#	14.55	4.51	2.79	280	燧石	1/2次	
30		○ (1+1)		O	トレンチ (II)	8.90	5.34	3.42	216	砂岩	1/2次	
31			○	I	概 (II)	—	—	—	(69)	燧石	1/2次	
32			○	O	#	—	—	—	(88)	#	#	
33		○ (1+1)		O	#	(6.35)	(5.36)	(2.23)	(108)	#	1/2次	
34			○	O	#	(9.39)	(4.73)	(3.27)	(188)	#	#	
35		○ (1)		A	#	6.72	6.15	4.94	205	燧石	発見	
36	63	○ (1+3)		O	#	9.28	8.10	3.88	350	燧石	#	
37		○ (1+1)		O	#	(6.65)	5.22	(2.82)	(189)	砂岩	1/3次	
38		○ (2+3)		O	#	(6.13)	(6.15)	(4.00)	(222)	燧石	1/2次	
39	54	○ (1+3)		O	#	(6.74)	(6.50)	(3.25)	(177)	安山岩	1/2次	
40	65		○	O	#	9.73	8.23	3.82	480	燧石	発見	
41		○ (2+2)		O	#	(3.15)	(5.79)	(4.51)	(345)	安山岩	1/2次	
42		○ (1)		O	#	(6.53)	(8.50)	(4.20)	(264)	燧石	2/3次	
43		○ (1+1)		#	#	8.77	6.79	5.45	410	燧石	発見	
44		○ (1+2)		#	#	9.97	7.16	5.45	450	燧石	#	
45		○ (1+1)		C	#	(10.97)	(6.16)	(3.13)	(303)	燧石	1/3次	
46		○ (2+2)		O	#	12.90	8.45	3.96	665	安山岩?	発見	
47	66	○ (1)		O	概	14.52	5.47	4.10	440	燧石	1/3次	
48		○ (1+2)		O	#	(11.70)	(7.76)	(4.24)	(385)	燧石	1/3次	
49		○ (1+1)		O	#	13.73	10.22	4.07	775	燧石	発見	
50	67	○ (2+2)		O	フリットE	12.18	9.47	5.49	850	#	#	

⑪石皿

No.	図 No.	出土地点	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	石質	破損状況	備 考
1	68	20#No.16	(22.85)	(28.30)	(9.96)	(6400)	砂料	面割欠	

⑫磁石

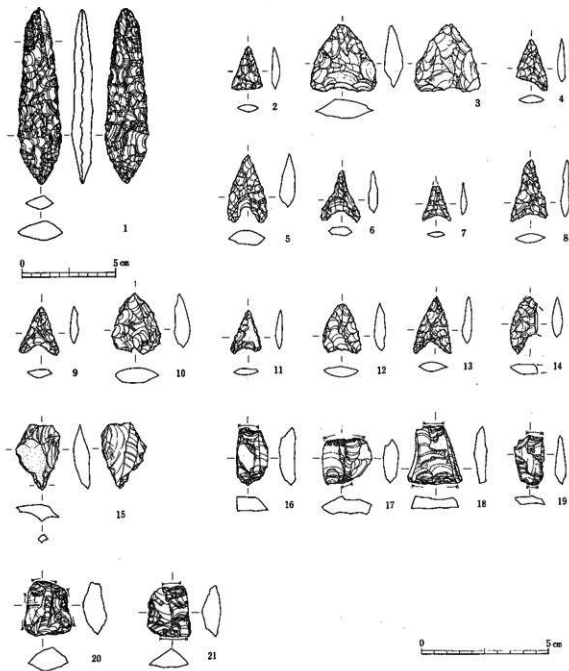
No.	図 No.	素材	磁面	出土地点	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	石質	破損状況	備 考
1	69	E	1	14#P 1	5.97	5.20	4.33	221	ホルンフェルス	尖形	礫の自然面をそのまま磁石としている
2	70	A	2	22#	13.35	4.27	1.25	115	粘板岩	#	
3	70	C	(5)	23#	(7.25)	(3.16)	(1.92)	(63)	磁板岩	1/4欠	
4		E	(1)	検 (II)	(16.30)	(11.21)	(6.06)	(1600)	安山岩	2/3欠	

⑬研鑽機

No.	図 No.	出土地点	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	石質	破損状況	備 考
1	71	検 (II)	4.44	3.53	1.90	49.20	チャート	完形	

⑭磁石・石核

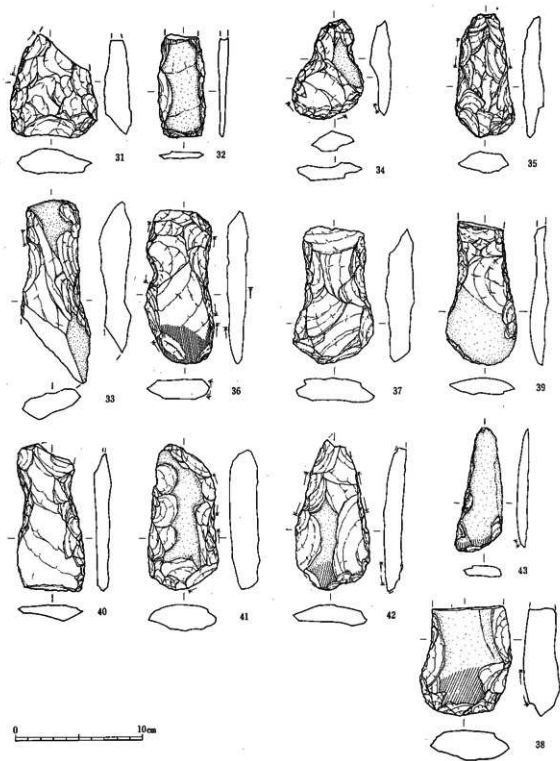
No.	図 No.	出土地点	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	石質	破損状況	備 考
1	1	11#	3.51	2.70	1.30	12.10	黒曜石		
2	14#	14#作床	3.49	3.18	2.25	24.60	#		石核
3	20#	20#No.25	6.20	1.94	0.90	13.10	#		
4	#	# 埋溝	3.46	1.40	1.40	12.30	#		
5	#	#	4.96	3.04	1.00	11.25	#		
6	#	#	2.85	2.48	1.68	10.02	#		
7	25#	25#	3.89	2.90	2.75	27.35	#		石核
8	#	#	4.94	3.58	1.04	22.50	#		
9	#	#	5.04	4.11	1.82	33.90	#		台核
10	#	検 (III)	5.01	2.56	1.74	27.50	#		



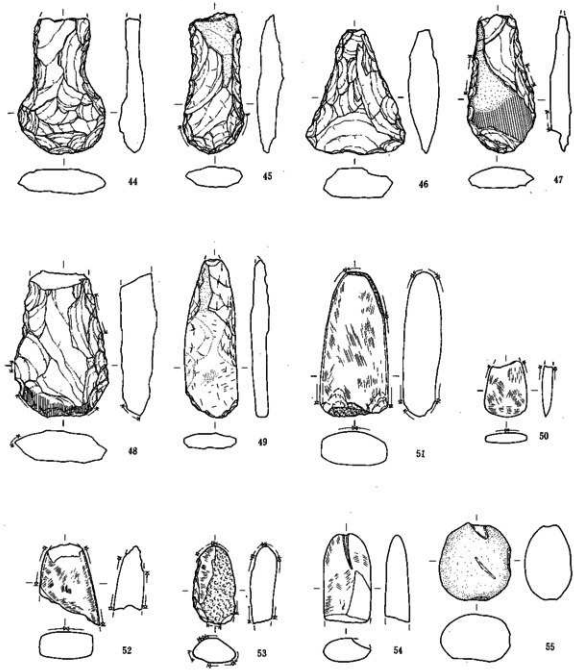
第57圖 石器(1)



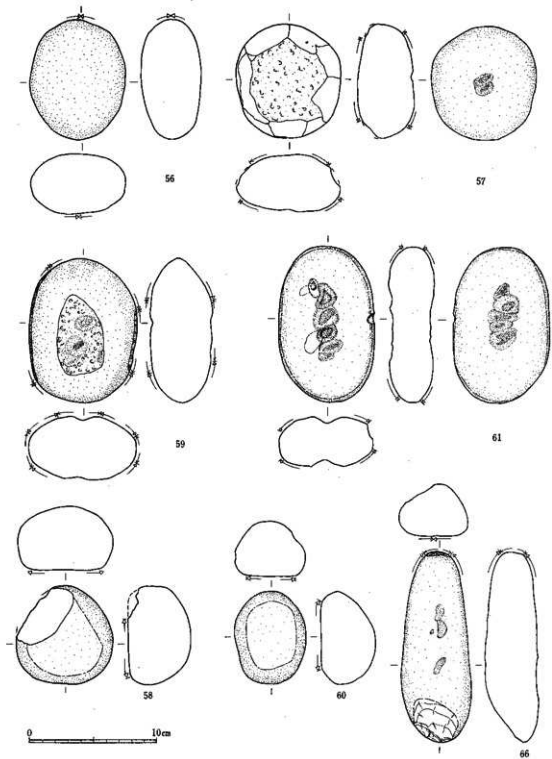
第58图 石器(2)



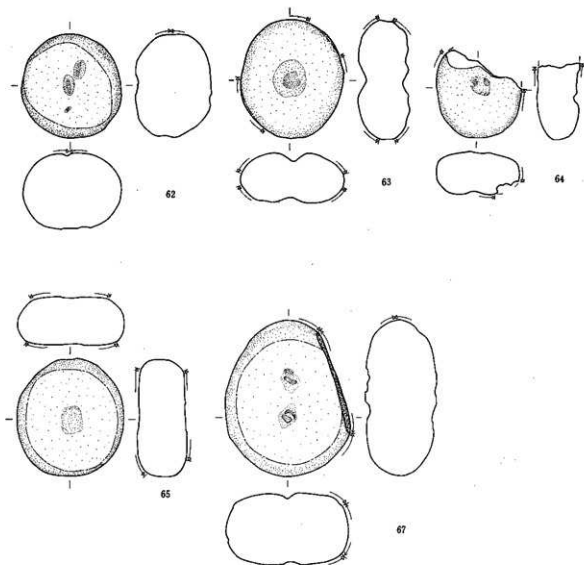
第59圖 石器(3)



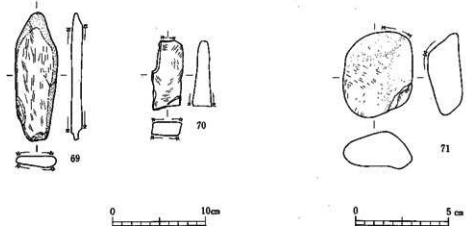
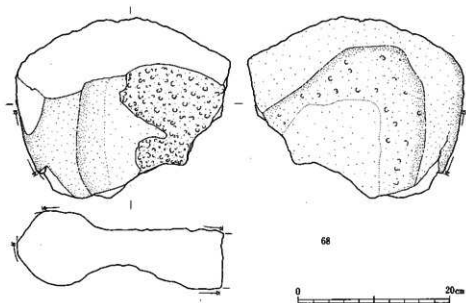
第60圖 石器(4)



第61图 石器(5)



第62圖 石器(6)



第63圖 石器(7)

4. 石製品・金属製品 (第64図)

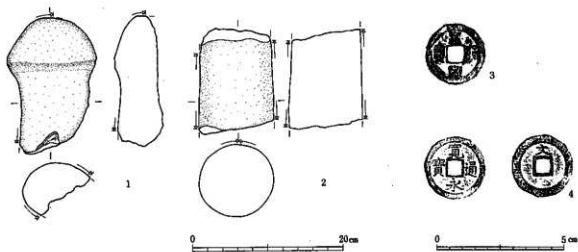
①石製品 石棒(1・2)は5点出土している。全形をうかがえるものはないが、残存部から推定される直径からいずれも大形の石棒と考えられる。破損状況は横方向に(輪切り状に)割れているもの2点(2)、縦方向に半裁して割れているもの2点(1)、小破片1点がある。石棒の製作にあたっては研磨が行われるが、特に1では亀頭部を作り出すため顕著に研磨が施されていた。なお、被熱して表面が赤色化した石棒が1点出土している。

このほかにチャート製の海浜石1点が第152号土坑から出土している。

②金属製品 貨幣(3・4)が2点出土している。3は第1号土坑から出土した皇宋通宝(初鑄年1039年)である。直径2.40cmを計り、表面は被熱によって変色化、破損がみられる。4は第2号土坑から出土した寛永通宝(初鑄年1636年)である。直径2.49cmを計り、裏面には「文」銘がある。いずれも火葬墓に副葬されたものと考えられる。

第4表 石製品一覧表

No	図 No	種類	出土地点	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	石質	破損状況	備考
1		石棒	20住No4	—	—	—	(281)	花崗石	残片	
2		"	土171	(10.40)	(10.00)	(10.30)	(1500)	安山岩	両側欠	
3		"	検(II)	(13.47)	(18.40)	(10.78)	(4650)	"	残片	
4	1	"	辨土	(18.00)	(11.34)	(6.52)	(1800)	緑泥片岩質	下半欠	
5	2	"	"	(13.80)	(10.00)	(9.52)	(1950)	安山岩	両側欠	
6		海浜石	土152	2.97	2.50	1.34	14.50	チャート	完形	



第64図 石製品・金属製品

第4章 調査のまとめ

今回の調査では、縄文中期の集落のほぼ全面を調査することができた。以下、成果と課題とすべき点をあげたい。

集落の形態は、中央に径約40mの円形を呈す広場とみられる区域をもち、住居はそうした空間を丸く包むように幅約20mで環状、ないしは馬蹄形状に展開する様相を呈している。中央の広場には、住居址は全く分布せず、土坑が集中してみられる。土坑の中には墓址とみられるものも検出されている。それらの分布は、2区中央部の広場に集中している。環状に展開する西側の斜面下方は、住居址域が途切れて、谷部に向かって開口している。この点は、集落景観を考える上で興味深い事項である。

次に、弥生前遺跡における時期的な流れを追ってみたい。弥生前遺跡に最初に人が住み始めたのは、中期中葉（勝坂Ⅱ式期）からである。第28・29・30号住居址は、遺物からみてこの時期に帰属すると考えられる。中期後葉～後期初頭にかけての時期が、本遺跡において最も繁栄する時期であったと考えられる。しかし、遺構の遺存状況が全体的に悪く、遺物がほとんど出土しない住居址もあり時期的な裏付けは乏しい。このうち、第20号住居址からは中期後葉Ⅳ（曾利Ⅳ～Ⅴ式）期の良好な遺物が出土している。第15・16号住居址は、遺物よりみて後期前葉（堀之内Ⅰ式期）とみられる。それらの平面形は柄鏡状を呈するとみられるが、遺構が調査区外にかかっているため全体を把握できなかった。時期的には、堀之内Ⅰ式期以降に下る資料がみられず、集落が営まれた時間幅は中期中葉（曾利Ⅱ式期）から後期前葉（堀之内Ⅰ式期）にいたるものとみられる。ただ例外として、有舌尖頭器が1点出土している。これに該当する時期の遺構は検出されていないが、弥生前遺跡の周辺に当該期の遺跡が存在するか、狩猟の場所であった可能性が窺える。

近年、中山地区では縄文時代の遺跡の発掘調査が相次いで行われている。本遺跡の近隣に位置している生妻遺跡で中期後葉の住居址が5軒調査されたのをはじめ、向畑遺跡で中期初頭の住居址が9軒、南中島遺跡で中期中葉～後葉の住居址が33軒、坪ノ内遺跡で前期～後期の住居址25軒と大きな成果を上げている。本遺跡と合わせて中山地区の縄文中期の様相の解明が期待される。

最後に、今回の調査に際しては中山土地改良区をはじめとする諸機関、地元の方々、炎天下の夏の日から寒風吹きすさぶ冬の日まで調査に参加されたの方々には、多大なご協力をいただいた。記して謝意を表します。

写 真 图 版



图版 1 弥生前遺跡全景航空写真



調査区全景（西側より）



第4・5号住居址



第6号住居址



第11号住居址



第12号住居址



第13・25号住居址



第14号住居址



第17号住居址



第18号住居址



第19号住居址



第20号住居址 遺物出土状況



第20号住居址 完掘



第20号住居址 土器出土状況(No.46)



第20号住居址 土器出土状況



第20号住居址 埋甕(No.38)



第20号住居址 埋甕(No.34)



第22号住居址



第23号住居址



第25号住居址



第28号(左)·29号(右)住居址



第1号土坑



第170号土坑



第171号土坑



第108号(右)·216号土坑



10



11



19



27



29



32



34



36

图版 5



37



44



48



38



45



46

图版 6



50



64



61



84



60



68



65

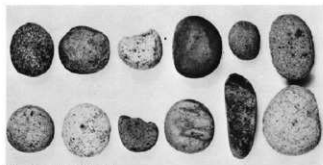


41



69

圖版 7



凹・敲・磨石(56-67)



土偶(3)



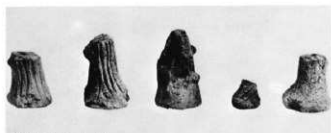
石皿(68)・石棒



土偶(4)



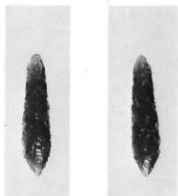
ミニチュア土器(11-12)



土偶(5・6・2・9・8)



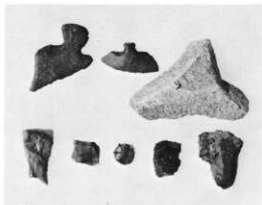
ミニチュア土器(13)



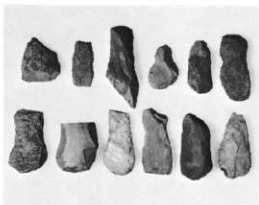
有舌尖頭器 (1)



石鏃 (2-14), 石錐 (15), ビエス・エスキュー (16-21)



石匙 (22-23), スクレイパー (24-29)



打製石斧 (31-42)



打製石斧 (43-48)
磨製石斧 (49-53)



砥石 (69-70)
石鏟 (55-54)

松本市文化財調査報告 No.88

松本市弥生前遺跡

平成3年3月20日 印刷

平成3年3月20日 発行

編集 松本市教育委員会
平390 長野県松本市丸の内3-7
TEL 0263(34)3000

発行 松本市教育委員会

印刷 アサカワ印刷株式会社

